

家庭雜誌

第五巻第十號

明治四十年八月一日發行

本號目次

棄てられたる少女…社說—二
共同責任……大石祿亭—六
銀時計……上司小劍—八
天使と青年……有秋生—九
病人用特別料理……山田嘉吉—一九
小品 大戰爭……緻瀨生—二九
非調和（妻共百種の內）……根津峰子—三〇
隨筆……一筆庵—三三
僕の今昔……牛歩生—三五
强い裁縫師（お伽噺）……深尾韶—三九
挿畫△道灌山蟲取△夏大根△市井スケッチ△夕映△馬の行水　高村眞夫
○處女景（緻瀨）○らく我記（なめし）○食肉の選擇法○慈善（牛歩生）○身の上の相談○渡米學生墮落の徑路○病床の一日（長加部生）○男の主張○鄰りの娘へ（ろーま字欄）○讀者の領分○田舍のたより○夏やすみ（木生）○新刊雜誌瞥見○編輯局より○いろ〳〵の出來事

最も進歩せる家庭雜誌

東京平民書房發行本鄉

第五回內國勸業博覽會銅牌及褒賞狀受領

登録商標

壽美禮おしろい

五二會品評會功勞銅牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレット煉製
陶蓋附乳白硝子器入
壽美禮おしろい



錫栓附乳白硝子壜入
ヴワイオレット水製



◉壽美禮おしろい◉ねり製定價（大壜二十錢 小壜十二錢）水製定價（大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜

すみれ白粉は　歐米諸國に専ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素新成蹟體等を以て配劑しあるを以て肌を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顏肌へを清々しく天然の色白きに至るべし菫『おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨て衛生上生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◉西洋洗滌劑 壽美禮あらい粉の特性

●弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に専ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せしものなれは朝夕此洗粉を御用ひ給へば能くあかを落し御肌を美しくなす

◉常に髪洗ひに用ひ給へば髪のねばりを取り油あか等を生せず又半襟ハンカチーフ絹綿等に用ひて能く汚垢を落す總て物を染白する性あり

◉使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを良とす

綠、藍、紅彩蝶番ひ　大袋入　二錢
罐詰　七錢五厘　袋入　壹錢

登録商標
西洋色白くなるあらひ粉
SUMIRE.
Washing Powder
壽美禮あらい粉



製造本舗　東京東兩國　元町兩國橋際

壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り



家庭雜誌

第五巻　第拾號

四十年八月一日發行

處女景

織瀬

午前四時に表の戸を拔けて外に出る。暫らく仰いで立ちはだかつた正面に、朝の雲のいろ〳〵が靉いてゐる。灰色、紫色、橙色、それらが層又層を成して、素地に藍色の繪絹を擴げてゐる。けふは雨の降り續いた六日目で、何うやら好い天氣になりさうだ。目白臺あたりには、まだ薄く霧がかゝつて、尖つた屋根の西洋造りが、濛と夢のやうに突き立つてゐる。が三百歩程前面の赤い柱、青い桁を特色とした辨天の宮や、ツイ近くに聳り立つ欅の大木や、それらは皆美しく自然の背景に見え透いて、清い空氣に觸れるのを喜んでゐるのは、我と同じさまである。場末なれば見渡すかぎり、家よりは綠が多くて、それが各々廣い面積を有つた處女林を成すやうにしのばれる。イヤ人の犯さぬものは森ばかりでない、まだ街道も、空氣も、雰圍も——。偶々曉女神の走り行く跡に殘る樂の音、かと思ふ御寺の朝の勤行が響いて來る。最うこれからが人の世だ!

十五日朝　牛門の里にて

社説

○棄てられたる少女

一

東京の南一哩ばかり、人家漸くまばらにして、寸ばかりの海波來つて岸を洗ふ所、風は徐ろに松並木を渡り、漁煙ゆるく中空に上りて、行客影まれに、昔し幾百千の魂魄が恨みを吞みたりけん鈴が森の刑場あり。流血洗ひ去られてより爾來風雨幾とせ、無縁の墓むなしく白くして、今はた夏草の徒らに青きを見るのみ。尾花の一穗、誰をかも打招くらん秋の夕べ、人若し此地を訪ひて一掬懷古の涙を濺がんか、樹間に隱見する巡査駐在所の軒燈は、今も輝やける血潮の色と見るべく、闇より闇にと葉末を辷る白露は亡き人の拔け出で來しかと疑はるべし。人は啾々たる鬼哭を、馬子唄かすかに消えゆく彼方に聞けりと云ふ。

二

鈴が森より都に入れば、兩側の紅燈次第に滋くして、狂歌亂舞の品川遊廓を見ん。更に進んで八山を過ぐれば、街燈また光淡くして、行人影黑く且つ大いなり。人は此處を呼んで高輪といふ。思ひ見よ。銀杏返し中形の浴衣、黑と紫の小さき帶、十七と十五の可憐の少女が離れはせじといぢらしく袖と袖とを結び合せて此處の鐵路に横たはりし、その星白き曉を。

あゝわれ思ふに堪へず。鈴が森に假令悽風絶えて、今日紅顏の少年、白頭の翁たらんも、われは高輪に死にし二人の少女を思うて、永久に紅涙を絶たざるべし。

三

讀者よ願はくば彼女を『藝妓』と呼ぶ事勿れ。たとひ天下の新聞紙を擧げて、『藝妓同士の心中』てふ標題を置きたらんも、二少女が『みのる』及び『柳子』てふ謂はゆる藝名なるものを有したらんも、吾人は竟に彼等を藝妓と呼ぶには堪へざるなり。

唯一語なり、唯一語、『藝妓』の一語、これ少女の全運命を支配したるの語にあらずや。彼の涙は之が爲に流れぬ。彼の涙は之が爲に涸れぬ。彼の羞恥の血は之が爲に迸りぬ。而して唯此一語の束縛より遁れんとし

て、少女は相擁いて鐵路に横はれり。然り、彼等は有せる唯一のものを捧げて、此醜名を社會に返戻せんと欲したる也。吾人無情と雖も豈に彼の二少女を呼ぶに「藝妓」を以てするに堪へんや。

　少女が初めて「藝妓」の語に接せる時、涙は滂沱として彼女の頬に流れき。紫の袴と社會の愛情と、彼女は同時に兩つながらを脱して、代れば變る振袖姿と冷やかなる浮世の風とを身に泌めぬ。見よ十五の春女すら早や生存競爭の塲裡に追ひ入れられて、無鑑札ながら此五月より柳子と稱して座敷を初むる身となりたりと云ふならずや。

　少女が二たび「藝妓」の名を聞ける時、涙は早や彼女の瞼に涸れき。蝶よ花よと愛でらるゝ世の常の娘子ならましかば、十五七の少女は暖かき希望の光りに漂はされて、鴇色もゆる八つ口を甘樂の微風に吹かせ、鶸色美くしき裾を怡和の玉露に霑ほはして、胸も輕ろげの歩みを街頭に揚ぐるなり。されど社會の忘れ去りたる此少女は、頬の色日に〳〵褪せて、滋かりし涙の漸くに涸るを見たり。いゝみのるも柳子も流石に美き衣は着たるなりき。着たるは涙を絞らんが爲に。世に忘れられ棄てられんが爲に。人に嘲けられ罵られん爲に。僞はらんが爲に。恥ぢんが爲に。而して身と心とを損はんが爲に。遂に鐵路に行かんが爲に。

　あゝ冷酷無情なる社會は、彼女が良家の處女として幸福なるの間、彼女に媚を呈し彼女に和風を送る事を怠らざりき。されど彼女が一旦不幸にして藝妓てふ別領域に旅せざるべからざるに至るや、社會は忽ちにして彼女に背き去れり。一朝にして彼の便り少なき少女を棄て行きぬ。棄てゝ而して彼女が陷穽に陷ゐるの日を凝視せりき。脂粉は先づ彼れの手先となりて愛々たる少女を闇黑に導きたり。少女、附近の荒涼たる景色に愕きて號泣慟哭すれば、社會は茲に冷淡なる聲を以て『是れ止むを得ざる也』と放言し、少女の眼よりして前途の百難を奪ひ、己れも亦見ざる眞似す。

　無垢なる少女は茲に又た目を擧げて己が周邊を一瞥し、其の境遇の醜且つ苦なるを嘆くや、社會は彼女の

耳に「貧苦」「虚榮」を囁やき、汝は此くしてのみ成功すべしと唆かす。少女頬褪せ涙涸れて、一夕落花狼藉なれば、社會は見て以て愉快なる笑聲を洩らせり。

此くて少女が絶望の淵に沈むも社會は風馬牛也。少女が煩悶の血を迸らすも社會は我関せず焉也。生くるも死ぬるも社會は一滴同情の涙を知らず。あゝ吾泣かざらんや。彼女の死したるは社會彼女を忘れたれば也。咄、社會此の少女を虐殺したり。

四

いゝみのるの家は名古屋に在り。五十餘歳の父母、八十に近き祖母、數江と呼ぶ十四歳の妹、これ彼女の最も懐かしき家庭なり。

新聞紙の傳ふる所によれば、いゝみのるは三年前今の藝妓屋石迺家に貰はれて養女となりしものなるが、出京後は全く古郷と音信を絶ちて、父母すら安否を知らざりしところに、今回死去の電報に接して、父母は其臨終にも會はざるは何たる因果ぞと嘆ち泣くさま、餘所の見る目も哀れなりきと云ふ。

社會に忘れられ棄てられたる少女は、之を以て見るに、また其の最愛最親の家庭よりして忘れられ棄てられたりしが如し。社會は忘れば忘れよ。されど家庭に忘れられ棄てられて、可憐の少女いかで能く耐ふべき。あゝ社會と共に彼女を殺したるものは彼女の最慈なる父と母となり。

昔しは人の子の生殺與奪の權、親の手に握られたりき。今は法律に於て然らざれども、尙は事實は殆んど之に同じ。此の至上の權輙く他に移すべからざる也。而もいゝみのると柳子の親は、赤の他人の石迺家に此權を托して、恐れざる事猫の子を與ふる時よりも甚だし。而して石迺家の女將伊藤お末は强慾非道を以て名あるの人、此至上權を行使する上に於て些の寛假猶豫あるべきに非ず。養女となすの目的固より營利に在りて、いゝみのるも柳子も大黒天の打出の小槌と同樣なる物質に過ぎざれば、打つほど得なりといふ勘定を以て、此の二少女に臨みしなり。彼等の藝が拙しとて小言は食はすれども、旨き飯をば食はせざるも、支那人に淫賣せよとみのるに迫りたるも、皆これが

爲なり。

かくあるべしと知りて藝妓屋に養女にやりたる親ならば無道なり。かくと知らずして遣りたるならば迂濶なり。吾人は少女の死に涙堰きあえぬみのるの親、柳子の親に向つて一度の叱責を加ふるの勇氣を有す。

されど柳子の家の如きは貧にして生計を營む事能はざるが故に、彼女を藝妓と爲すの止むを得ざるに出でたりと云へり。あゝ貧か、何ぞ其聲のわが胸に響くことの痛きや。

五

みのる柳子は性質共に温和しく、意氣相投合せるより、平生非常の仲善にて、柳子はみのるを姉さん〳〵と親しみ居たりと傳ふ。社會と、家庭と、朋友、親族の總てより忘れられ棄てられたる二少女が、僅かに假の姉妹を見出して、限りなく相睦べる樣、いぢらしと言はんか抑も悲しと言はんか。吾人は社會の一員として彼女の上に光明を分つ能はざりし無能を慚ぢ且つ怖る。

死する前日、二人が其腰卷を洗濯して之を纏へりてふ事を味ふ時、吾人は其齋藤實盛の古事を忘れざりし二少女の床しさを思ひて、爲に腸九回の感なき事能はず。あはれ世に棄てられたる少女は此くまでにマセてありし也。

六

日本全國、冷酷無情の社會に忘れられたる少女幾何ぞ。家庭なく保護者なき可憐の人果して幾何ぞ。日々に水に投じ刻々に鐵路に趨る者、多くは此の不幸なる人の子なり。現社會に連綿せる一聯の群衆が、深き〳〵死の淵に一歩一歩落ちつゝあるを見ても、今まで目くらく耳さとからざりし吾等は、今一朝にしてみのる孃と柳子孃との爲に明目聰耳の人となりぬ。われ等は人類救濟の途に急がざるべからず。殊に婦人の自由解放、別しては金錢產出、米麥交換の對象として使用せられつゝある肉塊的物質、即ち藝妓、娼妓、淫賣婦、の解放に努めざるべからず。

＊　＊　＊　＊　＊

兩手を擧げ小首を右に傾げたる、舞踏姿のみのる孃の寫眞、今わが手に在り。可憐なる姿よ、威嚴ある眼光よ。われ之を左手にして右手に筆を走らすれば、孃の双眸さながら活けるが如く、予の思ひと筆とを導きて、忽ちにして此の一篇を草し終る事を得たり。

雨やみて月圓かなる宵ともならば、乞ふ、われ高輪に御身が最後の地を弔らはん。

◎共同責任

大石祿亭

◎團體に屬する箇人が何事か非行を爲した場合に、團體は往々之を箇人の責任に歸し去りて自ら之を知らざるふりし、甚しきは其内密を世間へ風聽して得々たるものがある。例へば一家の内に於て其子が放蕩を爲す時、親たるものが之を新聞に廣告して、右の者不都合なる行を爲すにつき、以後何を申出でゝも取上げてくれるな、私に於ては一切無關係であると言ふ。又一國に於ても其人民にして多少異常な言動を爲すものがあると、彼は國民にして國民にあらずとか國賊であるなど丶言つて之を排斥する。其他何社と言ひ何會と言ふものに就き、其一員が過失を爲した場合の處分を見ると、唯だ其人を傷つけて之を除名し、團體そのもの丶潔白を保つに汲々たりと言ふ有樣である。

◎所が、斯くの如く箇人の責任を團體から全然區別するは、果して出來得べき事であらうか、又兩者を分離して觀察するは果して正當な事であらうか、余は之を以て最も大なる疑問であると思ふ。子を勘當する親が「親でないぞ子でないぞ」と言ふが、實際親の子でない子が此世にあり得べき筈がない、それと同じく國民が時の爲政者に反抗して國外へ追放せらる丶事があつても、國と言ふものが此世に存在する限り、國民でない人民が有り得べき筈がない。

◎基督教會の信者が何か失策を爲した場合に於ても、其牧師等は之を躓けるもの墮落したるものなりと稱へて除名する事がある。而して之に就て教會が他より攻擊を受ける時は、單に箇人の缺點にのみ歸して教會そのもの丶責任ではないと辯疏する。併しながら人間が罪を犯すと同時に信仰が消失せるものでもなく、俄かに神の子で無きものとなる筈はない。從つて同じ人間が之を破門すると言ふは甚だ不當な事ではあるまいか。又今日の宗教家が貴族や富豪に諂ふて卑劣な行をしたり、國家の權力に拜跪して臆病な事を爲すは、啻に其人々等一箇人の失態に止まらず、現代の宗教界を通じたる弊害として、全體が其責を引受くべきものではな

いか。

◎其他官吏や教育家が其職權を濫用して賄賂を收むるも、銀行者が投機的事業に手を出して經濟界に恐慌を惹起すも、すべて彼等の間に當然あり得べき事として、彼等が一般に其責を負ふべきものではないか。本來神を父として、すべての人類を同胞とするの見地より大觀すれば、我々人間社會は悉く共同責任であつて、誰獨り己れを善なりとして他人を陷入るべきものでない。況んや同じ信仰と同じ主義の下に集るものに於ては、此共同責任の意義を一層痛切に感じて、他人の罪過をも失策をも共に脊負ふて立つべき筈ではないか。

◎此點に於ては彼の放蕩無賴なりと言はるゝ博徒や俠客の方が却々感心なもので、仲間の一人が何か間違を起したり悪事を働いた時でも、他のものと其親分が之を引受けて解決の任に當り、時としては生命を捨てゝまでも之れが保護に勉める。これは特に社會運動に從事する我々が鑑むべき事で、我々は素より暴行を是認するものではないが、若しも我々同志の内より電車事件の關係者を出したとか、足尾の騷擾者を出したと言ふ塲合には、我々は單に其罪を箇人に歸して傍觀する事なく、他を咎めるよりも先づ自ら顧みて社會に對する責任を負ひ、併せて其善後策を講ずるに勉むるのである。

◎要するに我々は世の宗教家や教育者の如く、他人のみを傷つけて自ら清しとするを好まず、自分は姑らく汚れたるものと言はるゝも之を辭せず、すべての人と共に清くなるの日を一刻も早く迎へんと努力せねばならぬと思ふ。是れ則ち余が理會する共同責任の眞意義である。

●●●●らく我記（二）　なめし

今日もパンを探がして市中を馳け廻はる、疲れる、腹は減る、歸れば友あり

友「ドウだ見付かつたか」

余「まだ見付からぬ、チョッ餓死んだら身體を紳士閥の門へ持つてッて打付けてやらア」

友「自分でか？」

余「ア」

相顧みて啞然！

○銀時計

上司小劍

子供の時に、大人が懐中時計を持つて居るのを見て羨しくて堪らなかつた。中學に入るやうになつてから、父にねだつて白銅側の五圓五十錢のを買つて貰つた時のうれしさ。學校の往き返へりに、幾度かポケツトから出して見て、モウ何時になるだらうと用も無いに覗きこむ。

この白銅側の時計は餘程妙な時計で、時々疲れると見えて、十分二十分ぐらゐづゝ休息することがある。いつそ長く休息して居るのならよいのだが、十分か二十分ぐらゐ休息してはまた動き始めるので、時間は一向當てにならない。それで始めからこの休息時間を見込んで二十分も進めて置くと、生憎其の日は休息をしないと云ふやうなことがあつて、學校の時間を間違へたとが度々ある。

この白銅側の時計は、中學の四年級の時に友達に賣つて、其の代價で牛肉を喰つたが、それ以來今年まで、懐中時計と云ふものを持つたことがなかつた。人間が時計を拵へて、其の時計の針の爲めに時間を刻まれて、苦しみ喘いで居るのが、馬鹿〱しく思はれて、こんな馬鹿な器械を、肌身離さず持つて居るのはつまらないと云ふ考へがあつたからだ。

ところが此頃になつて、毎日汽車に乘つて、目黒から新橋の方へ通ふやうになると、さア時計を持たずには居られない。盲目滅法で停車場へ行くのは、時間の不經濟この上無しだ。そこで或る日銀坐の時計屋へ行つて廉い懐中時計を買はうとしたが、中學時代の時計に懲りて居るから、中途で休息しないのを呉れ、それから時計は小ひさいほど持つのに便利だから成るべく小形のをと云つて、銀側の小ひさいのを一つ買つた。

家へ歸へると、細君は其の時計を見て、これは婦人持ですよ、私に下さいなと云つて、自分の手筐の中に仕舞ひ込んだ。

嗚呼婦人持!!。時計まで婦人には特種の小ひさな、弱さうなのを拵らへて持たせる必要があるだらうか。これを見ても今の社會の婦人に對する態度が十分にわかるではないか。小ひさな所謂婦人持の銀時計は、

細君に取られたが、細君は始終それを持つて居る必要が無いので、不用な時だけ毎日僕が借用して居る。大きな男が小いさな時計を持つて居ると同居の友は笑ふ。

△深尾生云ふ。ボクも十四の時に一圓八十錢かの白銅の時計を買つた。それが丁度、小劍君の言ふ樣に、休息の好きな奴であつたので、今この文を讀むと何だか自分の事を云はれる樣で可笑しくて堪らない。

○天使と青年

有秋生譯

『一』

神は宇宙の玉座に就いた、彼の背後には蒼穹の碧を以て張れる天蓋輝き



彼の周圍には、燦爛たる光輝が無限に流れて居る。彼の前には無數の天の衆群動めき其の翼の一つ一つは、限なき星の廣野とも見るまでに、果しもあらぬ空の端より端に擴つて居る。

神の玉座に近く、彼の『死』よりも恐ろしく醜き一妖魔が進み寄つた。其石炭の如く黒き眼は人を壓するが如く、其厚き唇は黒く腐爛て居る。『我こそは「戰爭」なり』と。妖魔は、さながらに、腐肉の如き臭氣を口より吐きつゝ、皺枯聲に呼び

叫んだ。

「さらば、是を取れよ」と、

神は太陽よりも輝く黄金造りの鎧を取つて、妖魔の肩に投げかけつゝ、

「人の子が、戰爭の眞義を會得するまでには時代は尙ほ幾多の變遷を伴ふであらう」

と言ひ添へた。

妖魔は黃金の鎧に身を固めて、端しなき空中を通り拔け、深き混沌の海より、地球の方にと急いだのである。

茲に亦、曉明の色かと許り淸らかにして、輝く總身の色は、宛然に水晶の柱とも見る可き一個の崇高き天使がある。彼女は、空の如く曇りなき眼を仰げて、神の玉座に近く進み寄つた。

「「眞理」とは妾ぞ！」と、世の有ゆる樂の調にも優りたる聲高に唯だ一聲、彼女は叫んだ。

「さらば此を着よ」と、

神は言ひつゝ、「悲しき色」に染めたる上衣の一襲を彼女に與へて、

「人の子が眞理の意義を解するまでには、決して長時日を要せぬであらう」

と言ひ添へた。

斯て彼の女は、星斗燦爛たる迷宮の間を、通り拔け、通り拔け、地上の方にと駛けたのである。

「二」

軈て彼の女は、大日刊新聞『惡魔』の編輯局を訪うた。彼女を一目見た編輯長は、突差扉を閉め、編輯庶務員は直ぐに彼女を室內より突き出して了つた。而して、彼女を編輯室に入

たと云ふ怠慢の下に罪も無い扉番の少年に免職を命じたのである。

社會記者、日曜記者、雜報記者、批評記者、市政記者などの連中は、一緖になつて、彼女を廊下に突き出した。探訪員は卷煙草の吸ひ殼を、彼女に投げつけた。而して、最後には、彼女を階段から突き落して、哄然と許りに上より嘲笑を浴せたのである。

彼女は更に他の新聞社を訪問した。先づ目を上げて、屋根に懸けてある大看板を見ると、『眞理は最後の勝利者也』と、墨痕鮮に大書して、其下に更に大きく、『時代』新聞としてある。

彼女は先づ上つて編輯長室に入て行つた。すると、編輯長は、彼女を一

目見るや、忽ち蒼白になつて了つた。
其は此の編輯長、曾て彼女に面識があつたからである。
「一體何の御用で此處へ入しつたのですか。貴孃が吾社の秘密な事務課の方を通つて入しつたり。此室へ入つしやるとは、我社に取ては禁物になつて居るんですからな。何卒直ぐ御歸り下さい、貴孃の在つしやることは、私自身に取ても實に滅亡と言つて好いです」
編輯長の聲は慄へて居た。遂に彼女を突き出して扉を閉めて了つた。
彼の女は悲し相にして室を出て、街の方に行つた。而して或大會場の方に赴く群衆の中に紛れ込んだのである。
大會場には男女の群衆が充ち充ちて居た。
會場の一端に高い壇があつて、其處には一人の人が額に青筋を立て、眞紅な顔をして、頻りに演説して居る。
恰度彼女が入た時、辯士は
「國家の救濟は民主黨の任である、眞理は偉大なり、我黨は必ず勝利を得ん」
と絶呼して居た。
「おや、妾の同志は此處に居たのか。まあ妾とした事が、今まで少とも知らなかつた。ちよいと行つて逢つて置きませう——」
恁う言つて彼女は壇上に進み寄り、辯士の側に立つて居た。
辯士は大聲に喋り續けた。
「あゝ人民の爲に、人民によりて組織されたる我共和政府は、遂に地上より滅するの期なかるべし。」
是を聞いて居た彼の女は、忽ち其清しい聲を張り上げて、
「人民の政府?、人民より組織されたる政府?、まあ、飛んでも無い。「人民」が「人民」を支配することが出來ましやうか。世界の端より端に至るまで、苟も「人」が「人」を支配する權利は無い筈ですわ。」
是を聞いた刹那に、辯士は飛上つて叫んだ。
「畜生！ 女の癖に生意氣言ふな、叩き出して了へ、」
群衆は是に同じた。
「畜生、叩き出して了へ！、叩き出して了へ、」
彼女は巡査の手に渡されて、遂に街上に逐ひ出された。

無智の彌次馬連は、彼の政治家に煽動されて、喧々と彼女を追ひ廻して行く。

彼女は、諸方を追ひ廻された後、遂に再び或會場の中に入り込んだのである。

此の會場も、前の會場同樣に、立錐の餘地なきまで會衆が一杯になつて居た。彼女は巧みに其會衆の中に紛れ込んで演説を聞いて居た。

「斯の如く、我共和黨は實に國家の干城である、而して大なる「眞理」の基礎によつて立つ我黨は、思ふに最後の勝利者であらう。」

彼女は是を聞いて、

「おゝ、此處には本統に妾の知己が居る。」

然う言つて彼女は壇上に進み寄り、辯士の側に立つて居た。

辯士は更に語を更めて言ふ、

「小數者を支配する政府は最良最善のものである——、」

是を聞いた彼女は忽ち立ち上つた、

「左樣、其は或は本統かも知れませんわ、けれど、苟にも政府と名の附く以上は善政府惡政府と云ふ區別はありません、絶對に極惡非道なものと言つて好いです。

人民の意志に反して財産を奪ひ、亦は其を少數者に分配する「法律」を有てる政府は全く、權力階級の極惡非道な機關ですわ。」

是を聞いた辯士は、

「畜生！飛んでもないことを言ふ、其樣ことを言はれては、自分等は落選して了ふ。畜生、叩き出して

了へ」

群衆は是に同じて、

「叩き出せ、叩き出せ」

と叫び立て、大騷を起したので、彼女は遂に逃げ出して了つた。

其夜哀れな彼女は降る樣な星の下に坐して、露にぬれつゝ一夜を明したのである。

「三」

東の雲が菫色に破れて、太陽の光が再び全地球に照り亙つた其翌朝の事である。彼は亦街を歩いて行つた。

男女の群衆が、同じ方に急いで行くのを見た彼女は、其一人に向つて尋ねた、

「貴女方、何處へ入つしやるんで御座います？」

『眞理を聞きに參らうと思つてます

の」

問はれた婦人が答へる。

『其ぢや御一緒に參りましやう、」

彼女は群衆に伴いて行つた。

遂に彼の女は偶ある煉瓦作りの大會堂の中へ入つたのである。會衆は何れも靜粛にして居た。軈て時間が來ると信徒の一群は起立して悲しい讃美歌を歌つた。歌が終つて後、黒衣を纏うた長身痩軀の人は靜々と立ち上つて、次の樣なことを言つた。

『快樂は罪惡であります。殊に此聖日に於て歡樂を盡す人は、神の前に大罪を犯して居る人であります。」

恁う言つて後、彼等は、自分等が世の多數者の如く不幸でないと言ふことを神に感謝し、併て、世の神を知らざる多數の人が、一日も早く其不幸を自覺する樣にと祈つた。

祈禱が濟で後、彼等は次の樣な法律案を議院に提出しやうと言つて、會議を開いたのである。其は、『吾人の善なる如く、亦他人をも善になす法律』と云ふのであつた。

先程より此如何にも愚妄しい事を靜と辛抱して聞いて居た『眞理』は、此時つと立上つて、

『痴呆な！ 盲目！ 「眞理」と云ふ妾が此處に居るのを知らないんですか」

是を聞いた善男善女は一同呆氣に取れて了つた。中にも一人の老紳士は小聲で、

『貴孃、此處で其樣ことを言つては不可せん、お出なさい。」

老人は遂に彼の女を出して了つた。

斯て後彼女は市中を歩いて、市の最も大きい會堂へ入つて行つた。其處には蠟燭の火が、晝の樣に輝き、香の煙は雲の如く靉靆いて居る。式が始まると、ピヤノ、オルガンは宛然に天樂の如く響き、莊嚴莊重を極めたる祭典は、長老によつて行はれた。軈て式半ばにして、紫衣金冠の大長老は、靜々壇上に登つて曰ふには、

『眞理は唯だ此聖なる敎會にのみ存して居ります。總て他の者は外の暗に棄てられたものであります」

是を聞いた彼女は、亦もや立ち上つて、

『其樣ことはありません。妾が本統の眞理です、」

信徒は是を聞いて、非常に激昂し、

今にも飛びかゝつて、彼の女を捕へ樣とした。然し長老は其を制して、

『哀れの者よ！ 彼女は狂人です。彼女の言ふ事を御信じなさるな。眞理は唯だ我等の中にのみ存して居ります、』

「四」

遂に其處を出された後彼の女は、偶ある石造の大なる建築の前までやつて來た。其の鐵の門は固く閉じられ、其窓は鐵板で蔽はれて居る。彼の女は附近の小兒に聞いた。

『一體此處は何處なの？、知つてるなら敎へて頂戴、』

小兒は呆れた樣な顏をして、

『此處は盜賊の入つてる監獄よ。姉さんお前知らないの』

彼の女は監獄の中へ入つて行つた、其の眞暗な監房の內には、鎖に縛られた青年が一人仆れて居た。然し彼女の手が一度彼の青年の額に觸つた時、暗い石獄の裡にも赫燿たる光輝が充ち充ちたのである。

『お起きなさい、妾が兒よ、』

彼の女は青年を抱き起した。青年は稍霎時彼女の顏を瞶めて居たが、其蒼褪めた頰には見る〳〵歡喜の色が溢れて來た。

『お〻、貴婦は「眞理」!! 私は今迄何なに貴婦に遇ひ度いと思つたか知れません』

爾う言ふ間にも流れ落つる嬉し淚は青年の頰を洗ふ。

『私は最う死ぬんです。何ぞ其前に私を接吻して下さい。』

『えツ、死にかけて居る？、何時死ぬの？ 亦何故？』

『私は明日死刑に處せられるんです。其は私が始終貴婦に從つて行動して居たからです。私は先日も街の辻に立て演說をしました。人は其同胞を支配する權利がないと云ふこと、人は相互扶助の觀念を持たねばならぬと云ふこと、人の組織した政府は暴虐非道なものであると云ふことなど、私の知つてる限りのことを演說しました、』

『お〻、貴君は、其の爲に死刑に處せられるんですか』

『はい、私は其の爲に明日の朝死刑に處せられる事に決つたのです、』

是を聞いた時、彼女は惆悵として、天を仰いで長嘆した。

「あゝ、妾は、貴君が死んだ後々までも、一緒に行つて進げましやう。」

翌朝になつた時、彼女は青年を抱き上げて接吻した。青年は歡びの笑を漏して、從容として斷頭臺上に登つた。其は實に四周の群衆が、怪み驚く許りの立派な態度であつた。

戞然！　殺人機は動いた!!　血は瀧の樣に降つたのである。

此時まで斷頭臺の階段に腰をかけて居た彼の女は、悲慘なる樣を見るに堪えでや、涙を流して其の顏を蔽ふて了つた。

忽ち其時！　四周の群衆は歡喜の呼を揚げた。國旗は閃めく、花環は飛ぶ、煙花は上る、軒燈は吊り下げられると云ふ風で、市中には非常なるお祭騷が始つたのである。其間に一方では群衆が斷頭臺の方へ、押しかけ詰めかけ、我先にと、此の極惡無道なる『無政府主義者』の殘骸を見んと犇めき騷ぐ。

恰度此の騷の最中に、金甲燦爛たる一武人が、月毛連錢の駒に跨り、頭には月桂冠を戴きつゝ、威風堂々と乘り込で來た。是を見た群衆は『大陛下萬歲！　元帥陛下萬歲！　萬歲！萬歲！』と、咽の涸れるまで連呼する。凱旋の陛下に次で無數の軍旅は、隊伍堂々として、堅甲を輝し、劔槍を閃かしつゝ遣て來た。人民は我勝ちに爭つて兵卒等の足を接吻すると云ふ有樣。

軈て隊伍の中央に、一の軍旗が通過して行つた。群衆は是を見て、亦もや萬歲、萬歲と、天地も爲に震撼する許り。

然し『眞理』は、此の凱旋將軍等の中に、彼の、恐る可く惡む可き『戰爭』てふ妖魔の姿を見たのである。

隊伍と群衆は遙の果に進み行き、萬歲の聲は、何時しか聞えぬまで微になつた時、彼の女は、斷頭臺上より、死刑に處せられたる青年の死骸を下して、自ら其美はしき外套に包み、母の兒を添乳する樣に抱いて、星斗燦爛たる蒼空の彼方にと駛け去つたのである。（了）――フリードムより

○食肉の選擇法

一　肉の性質

肉は大概、瘠せたものよりも肥えたのを佳しとする。肥肉は瘠肉より

も比較的水分少なく、蛋白質も同量或は稍少量で、而して水分の代りに脂肪の量が增してゐる。

幼き動物の肉は、勿論老いたものよりは軟かで、色も淡紅色を帶びて心地がよい。老肉は硬くて暗紅色でおまけに幼肉から見ると脂肪分が少ない。であるから食料として幼肉の方が消化がよいのである。

同じ一疋の動物の肉でも、其身體の部分に從つて、養分や味などを異にする事がある。牛肉は尾部、腰部、前肋部、及ひ臀部を以て最も賞美すべきものとしてある。上下肢膓、中肋部、腓膓部、及び上臀部を之に次ぐ所とし、脇部、肩胛部、胸部を以て第三等とし、頷の垂肉部、頸部、及脚部を以て下等とするのである。

一般に肉の筋肉の部分は、腦、肝臟、腎臟、犢の咽喉、下の腺肉、獸腸、足等よりも滋養分があるので、又消化も宜しい。

睪丸を切除いた動物の肉は、生殖機能を有する動物よりも比較的柔軟である。

獸肉は凡て屠殺後直に食すれば、其の味は却つて善くないで、死後一定の時間を經た方がよろしい。

二　肉の種類

●●牛肉は獸肉中でも最も多く用ひられて、又頗る滋養に富んだ、消化もよきものである。

●●羊肉は味濃厚にして、殆んど牛肉と同樣の滋養分がある。消化は牛肉よりも一層良好である。

●●豚肉は脂肪が多く、消化は稍や劣るけれど、軟かであつて、彈力の少ない纖維を有つて居る。其の味は濃厚で、滋養の効も大である。然し餘りに多量を用ゐるは宜しくない。

●●馬肉は食料として餘り賞味せられぬものである。けれども病肉か或は老肉で無い限りは、其滋養の價値は牛の次に位するものである。

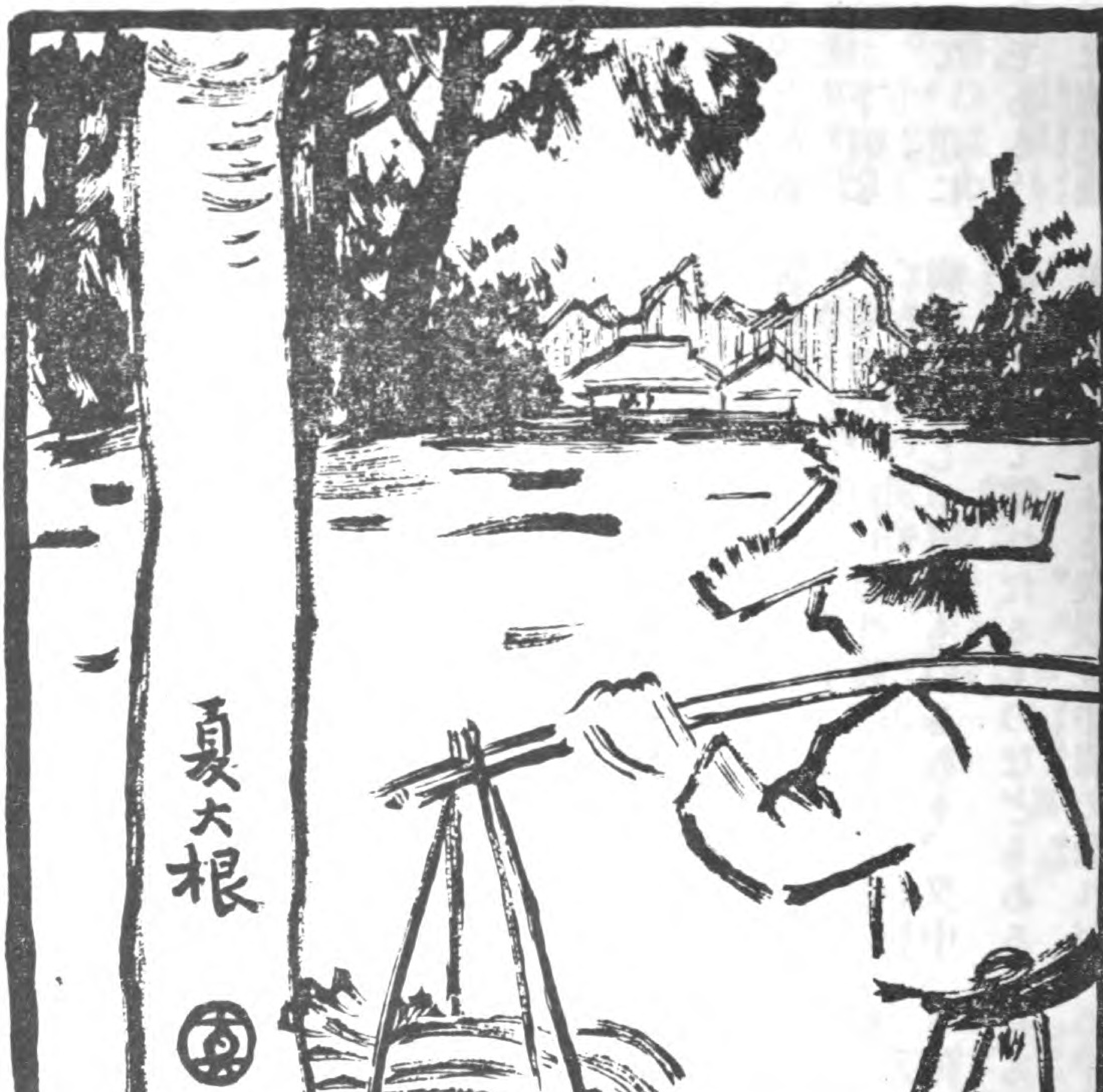
●●鳥肉は獸肉に比べては、筋纖維も細く密着して、脂肪こそ含むけれども纖維間にあることが少ないので、一般に柔軟である。消化もし易い、概して獸肉よりは脂肪が少ない。味も稍や淡美である。鳥肉の內では、家禽は野鳥よりも脂肪が多い。殊に鷄と鶩とは、其滋養分殆んど犢肉に比すべき程のものである。そして夫よりは一層消化し易いので、病後

の人などには、牛羊の肉をとる前に、先づ食用に供する事が出來る。鴨、鵞は豚肉に比すべきものだ。

●●魚肉は其成分は、その灰分の幾分を異にするの外は、殆んど獸肉に類してゐる。脂肪が餘り多いものでない限りは、其消化も甚だよくて、直に空腹の感を起す。

●●魚類は生長の時期に於て毒物を有するものがある例へば鱒の絛蟲の如きものである。其の他蝦、蟹等にも寄生蟲がある。

貝類も亦時に有毒のものがあつて牡蠣、蝦等にも稀には中毒する事がある。殊に不潔の水中に棲息してゐるものには危険なのが多い。けれども之を久しき間、清水中に放置すれば、毒性が消失する事が多いのである。貝類の毒は曹達水を以て煮るときは其の毒分を失はしめることが出來ると云ふ。



三　病肉

肉中には種々の傳染病の菌、或は寄生蟲を含むことがある。歐洲各國の統計を聞くに、百頭の牛につき、五頭ぐらゐの割合で結核症に罹つて居るものを發見するさうであるが、我國では凡そ百頭につき三頭位ゐの割合で、其筋から屠殺を禁ぜられてゐる。屠殺場に就いて調べて見ても、どうも洋牛には比較的に病毒が多いやうである。

牛馬などに發する傳染病は、牛疫、豚丹毒、馬鼻疽、脾脫病、膿毒症などであるが、是等の病肉を食ふと、病氣を起すと云ふ。

寄生蟲の最も多いのは旋毛蟲である。主に豚肉にある　其幼蟲は石灰質の小嚢に包まれ、細小なる白點となつて存在し、長く生活力がある。よく寒冷に堪へ、醃藏等にも亦稍や堪ゆると云ふ。人が若し之を食へば、胃腸に入つて石灰質の嚢が溶解され、幼蟲は腸壁を穿つて肉中に食ひ入り、速に生長繁殖する。之が爲に人間は惡心、嘔吐、腸痛、下痢などや、其他、發熱諸症を發して、遂に死に至るやうな事が多いのである。然し幸にも我邦在來の豚には旋毛蟲は少ないとの事である。

牛豚などに寄生する條蟲には二種あつて、一を有鉤條蟲と云ひ、他を無鉤條蟲といふ。其幼蟲を包む嚢は豆大であつて、各筋肉間及び結締組織内にある。有鉤條蟲のは主に豚肉にあり、無鉤條蟲のは主に牛肉内にある。人若し之を食ふときは、幼蟲は腸の内面に付着して生長する。そして時としては其長さ一丈餘りもある所の條蟲に變ずるのである。之が爲に、人は腸腹痛、食慾の減退、嘔吐　便秘、下痢等を起し、營養を妨害される。

右の外、肉には牛疫、結核などの病毒を有して居るものもあり、又中毒によりて斃れたるものなどもあるが、之を食ふと矢張り中毒の恐れがある。歐米では、食慾を進めて體を肥えさせる爲に、砒石即ち鷄冠石を動物に與へる事があるさうだが、砒石は實に有毒のものであるから、之によりて死したる動物の肉は、勿論有毒である。

結核は、牛畜では永く其局部に止まつてゐて、後始めて筋肉間に擴がるといふ。そして牛ならば肺、淋巴腺を犯し、豚は肝臟を犯す。羊は結核に感ずるとが少なく、鷄は通常の肺結核などは感染しないけれども、固有の結核即ち鷄結核を有つて居る。鵞及び鴨は免疫性であると云ふ。然しながら結核は其の生肉を食ふより傳染するものであつて、長く煮熟せる肉は無害であると云ふ。

四　肉の判定

良き獸肉は鮮紅色であつて、餘り

淡くなく又濃くもない。筋繊維と脂肪との混合せる其様子は恰も大理石の如き觀を起すべく、過分の濕氣もなく軟らかでもない。少し香ひはあつても不快の臭氣ではない。そして一二日間放置しても、水を滴らす樣なことは無い。

不良肉は不潔、變色、軟化、惡臭等があるもので、滋養も劣等である。又屢々有毒なるに依り、重大なる病氣を惹起す原因となる。

肉が腐ればプトマイン(屍毒)が生じて、中毒を起させる。病氣で斃れたものは腐り易い。又屠殺したものでも、非常に驅逐疲勞させたもの丶肉は腐り易いのである。腐敗しかゝつた肉は、次第々々に暗紅色に變ずる。其の味は過度に淡白で、稍や甘く、不快の臭味があるものである。

(「教育時論」より借用)

○病人用特別料理 一

山田嘉吉

一 一般の心得

△病人用の食物は、消化しやすいのを第一とする。

△其次には、滋養に富むのを選む。

△病氣の種類によつては、固より醫師の言葉に從つて食物を選まなければならぬ。

△衰弱した病人には、先づ肉茶などを始めに薦め、終つて汁類を飲ませるものである。

二 燒肉 Beefsteak, mutton chop.

△最も柔かな鞍下肉をよしとする。

△ステーキは餘り燒すぎては惡るい

△チャップはよく燒くものである。

△注意＝衰弱甚だしい病人には、これらを薦めぬをよしとする。

三 牛肉茶 Beef tea

(分量)

△牛肉一斤△鹽一つまみ。

(方法)

△牛肉一斤を小さく切つて、壺の中に入れ、よく蓋をする。水を中に入れずに。

△肉を入れた壺を其まゝ鍋の中に入れ、弱い火で三時間から四時間煮る。

△肉が白い綿のやうになり、肉汁が外へ出た時に、壺を鍋から取出して鹽で味を付ける。

△しばらく冷して置いて、上に浮いて居るかすを取りすてる。

四 牛、羊のブロース Veal or mutton broth

(分量)

△牛又は羊二斤△大麥又は米一オンス△鹽一つまみ。

(方法)

△二斤の羊肉を取り、鍋に入れ、二コートの冷水を注ぐ。

△大麥或は米を一オンス入れる。
△之を煮て沸騰した時に、上に浮いたかすを掬ひ取る。
△半茶匙の鹽を入れ、尚ほ煮て、半分に煮つめる。
△之を漉して、冷やし置き、それから上に浮いてゐる脂を取り去る。
△これで出來あがる。
△若し野菜を入れるならば、蕪一つ、人參一つ、葱一つ、薄く切つて入れる。出來あがる凡そ三十分位ゐ前に入れるのである。そして漉すことは前に書いた通り。

五　鷄肉汁 Chicken broth

（分量）
△鷄肉二斤△鹽及び胡椒一つまみ△卵黄一つ。
（方法）
△鷄肉二斤を鍋に入れ、冷水二コートを注ぎ、よく蓋をして煮る。
△最初煮え上つた時に、上に浮いたかすを掬ひ取り、弱い火で煮ること三四時間。
△水が半分位ゐに煮つまり、肉が極柔かになつた時に、鹽少しと胡椒極少しを以て味つける。
△漉してから卵黄一つをかろく掻きまはして交せる。

○慈善

牛歩生

日曜日の午前、煙草屋の二階に、同居している友を訪ねて、二階から往來を見てゐると、五十餘りの女乞食が、斜向ふのパン屋の軒に立つて哀れみを乞ふて居る。店に居たパン屋の妻君、同情深い人と見えて袂の中から赤い丸い物を出して乞食に惠つた。乞食は幾度か頭を下げて行つて仕舞つた。僕がチラと見た處では、それは壹錢銅貨か貳錢銅貨、どうも

五厘錢ではないらしかつた。

窓にあつた太陽の色がいつか消えて向ふ側の店先へソロ〳〵這ひ上らうとしてゐる時分、僕は晝飯の馳走になつて、卷莨を吹かし乍ら窓に寄つて往來を眺めていると、パン屋の店には禿頭の御亭主がキチンと座つて新聞を讀んでいる。丸髷姿の妻君は見えない。其處へ先刻の乞食が歩つて來て、何か言ひ乍ら手に摑んだものを出すと、御亭主殿は硝子箱の中から、餡パン四個を出して乞食に渡した。そして『難有う』と言ひ添へた（尤も小穢いといつた樣な顔はして居たが）。乞食は禮も言はねば低頭もしないで、サッサと行つて仕舞つた。

餡パン四つは二錢だと云ふ事だが、その二錢の中には先刻妻君の惠んだのが交つてるのではあるまいか。僕は友に言つた、『手數の掛つた慈善ぢやないか。』

身の上の相談

此の欄に於て、記者は讀者諸君身の上の御相談に應じます。

吾々が今日この多艱多難な浮世の道を辿つてまゐります内には、險悪な岩角に前を阻まれたり、暗憺たる雨風に袖を濡らされたりする事が屢々あります。其時もし吾々が一人寂しく居りましたならば、甲斐なき弱き心は將に地に落ちんとして、涙はひたぶるに頰を傳ふでありませう。けれども若し、そこに親切なる友の、つぶろゝ我が胸を撫でゝくれるとしたらば如何でせうか。身内の勇氣は必ずや奮ひ起つて其人を光明の門に導くに違ひありませぬ。

さらば記者は此の親切なる友の役目を少しなりとも勤めたいのであります。思ひ惑ふ人にはづれを送り、怨み憤る者には安んずるの法を說小さき助言を呈し、悲しみ泣く人には慰めの音かんと欲するのであります。

愛する讀者諸君、紳士と平民と勞働者とを問はず、貴夫人、令孃、お婆さん、娘さんを問はず、「我は此難局を如何に過ごさんか」てふ問題に逢着した時には、どうぞ直ちに記者の意見を御聞き下さい。或は其問題解決の爲めに多少の足しともなりませう。記者は唯誠心誠意を以て諸君に満足を與へる樣努める積りで御座います

●相談するに就いて

△月の十五日までに本社へ着いた相談は翌月一日の雜誌で直ぐにお答へ致します。

△お望みに依つては雜誌の上でなく、手紙の上で御相談にも應じます。其場合には返信用郵劵御封入の上、平民書房編輯局内深尾宛にして頂きたい。

△秘密の必要あるものは勿論嚴重に秘密を守ります。

△御相談の書面は文字も文章もハツキリと判る樣にお書きを願ふ。

●死して罪を謝すべきか

茨城女

記者さま、私は今死して罪を謝すべきかと云ふ破目に陷ゐつて居る哀れな女で御座います。どうぞ一應身の上話しをお聞き下さいまし。

私の兩親は農業を致してをりますが、先年兄が師範學校を卒業して教員を勤めることになりましたので、私も自然學問に親しむ樣になり、どうか一度は東京で勉强させて下さいと父母にも願つて居たので御座います。ところが幸ひ兄の世話になつた人で、東京の教育社會に可なりよく名を知られた人がありますので、兄から其人に賴んで私の前途を見て貰ふ事になりましたのは、左樣、今から數年昔で御座いました。○田○○○といへば大抵の人は知つてる位ゐの教育家だつたものですから、私も喜んで、十六の春といふに其人の家庭に入り、働きながら學問をさせて戴きました。

奥さんは大層心切な方で、萬事につけて世話を燒いて下さいましたので、私も實の姉さまの樣な氣がして一年ばかりは夢の間に過ぎ

て了つたので御座いました。ところがお悼はしや、肺病といふ厭な病に冒されてお咳から咯血、次第に御容態が悪るくなるばかり。

先生も替い方では御座いましたが、奥さんの御病氣が悪るくなるにつれて、一つ室にゐらつしやる事の出來ぬ淋しさにか、人なき折々には私の處へ入らしつて、色々長いお話をしてはいらつしやる。

奥さんは一年も床の内にお暮らし遊ばす。先生は益々淋しくていらつしやる。或晩私は奥さんを御看病申して餘り疲れたまゝ、室に退いていぎたなく熟睡致しましたが、フト物に驚いて明け方近く目を覺して見ますと、あゝ私は此時ほど驚いた事はありません。恥かしく掻き亂れた姿の私の傍に、影のやうに今一つの黒いものが居るでは御座いませんか。申上げずともお察し下さいまし記者さま。

私は熟うく〳〵睡つた夢の中の出來事を了解致しました。と同時に、運命とやら申す神の囁きが耳を聾するばかりに聞えたのです。私は聲を惜ますサメ〴〵と泣きました。涙で體が溶けても善いと思ふほど散々に泣きました。黒いものは私に手を掛けて何か言つて居たやうで御座いましたが、私は夫を聞く所ではありません、枕元に飛起きて、口惜しい〳〵とばかり泣きに泣いたので御座います。今思へば何故此の時に死んでゐなかつたのだらうと思ふのです。

先生の心切は翌る日から一倍でした。欲しいと思つた物は何でも買つて下さる、行きたい所へは伴れて行つて下さる。實の兄さんでもと、淺墓な私はモウ嬉しい〳〵心地がして來ました。

黒い手は夜毎に私を責めましたが、それもツイ餘り辛くなくなつて來たので御座います

記者さま、嘸不埒な女と卑んで下さいませうれ、ほんとにお耻かしい。

奥さんはとう〳〵彼の世の人となつてお了ひになりました。私はもつと悲しからうと思つてゐましたのに、餘まり悲しくもありませんでした。自分でもどうした事かと思ひましたが判りません。

うか〳〵と月日が經つて了ひました。或日フトある男の方が私に家庭雜誌を見せて下さいましたので、私はそれを拜借して何心なく讀んでまゐります内に、どうしたものか今までに無い變な氣が起りまして、自分は學生であるのだらうか、下女であるのだらうか、妾であるのだらうか、妻であるのだらうかと思ふ内、遠い遠い行末の覺束なき運命も直ぐ目の前にチラつく樣な心地がして、心許ない淋しい悲しい情けない、何とも云はれぬ思ひに胸はかき亂れて了ひ

ました。
　かりそめの考へでは御座いませんでした。今こそ多年蔽ひかくされてゐた良心が芽を出したので御座いませう。責めて、悔んで、考へて、もう書物を手にせぬ日數、碌々御飯も戴かぬ日が今日で九日になります。記者さま、私はホントに大罪を犯しました。一つには世の中に、一つには奥さんに。あゝ奥さんは如何に怨んで死んで下さいましたらう。かう思ひますと、私はもう身の置き所も何も御座いません。
　死んで此の大罪のお詫を致しませうか。けれども凡婦のあさましさ、故郷に居りまする最愛の父母や兄弟を思ひますと、さすがに生命が惜まれますので……せめて幾何なりとも此罪を輕くする事が出來ますならば、私はどれほど此汚れた身を苦しめても介ひませぬ。どうぞ愚かな妹を十分叱つて下さいまし。

●答　記者

　御手紙は深き同情を以て拜見いたしました。お心の中お察し申しますが併し事件は左程お悲しみになるほどの事はなく、況してや生死を賭するほどの大問題では無いと思ひます。あなたは如何にも大罪を犯した樣に思つてゐらつしやるのですけれど、少し落付いて考へて見ると、私はあなたに左程の責任があるとは思へませぬ。先づ此の問題を初期、中頃、最後の解決、と此う三つに別けて考へて見ませう。
　あなたが最初、〇田さんの好意を峻拒する事の出來なかつたのは、師弟の關係もあり、世話になる恩義もあつて據ろないとは言ふものゝ、變な態度の見えた時に絕對に刎付けなかつたのは多少の落度でした。此小さな事の爲めに、多くの少女は取返す事の出來ぬ運命に落ちて了ふ例が多いのであります。是は多少あなたの責任。
　看護に疲れた夜の出來事。之は〇田こそ大罪人です。あなたは何の責任も無い。世には汚されたと口惜しがつて此かる事件の爲に貴重な生命を棄てる者がありますが、私から言へば心の狹い骨頂です。強姦されたのは例へば泥棒に切り付けられたのと同樣、何の恥もありませぬ。泥棒に傷を負はされたとて、心は何の汚

されろ事がありませう。私はあなたが此事について何の責任をも感ずる事なく、天下公衆の前に其事實を公言して破廉恥漢の面皮を引むいてやるほどの勇氣のある事を希望します

其後に至つて奥さん存命中にも拘はらず、あなたが遂に進んで〇田に許して居たといふのは、遺憾千萬です。此一事に依つて、あなたは今の様に重い責任を感じねばならぬではありませんか。あなたは此塲合、二個の迷妄に陷ゐつてゐたのです。其一つは肉慾に驅られて人情を失つた事、一つは强姦せられたのも、之を許すのも意義は同じだと思つた事。即ち濡れぬ内こそ露をも厭へを踏み違へて自棄に陷ゐつた事です。あなたは此の罪を消す爲には、速かに其迷妄から脱却せねばなりませぬ。而して切めては奥さんの身寄にでも出來るだけの心切を盡してお上げなさい。死んだとて罪の消えるものではありませぬ。

最後に、此事件を如何に解決すべきかと云ふ問題。あなたが〇田に對して愛の心が無いのならば、唯だ速かに其家をお出なさい。もし既に愛情が生じてあるならば、其關係を續けるのに何の差支へもありません。いつまでも過去の罪惡を悔み悲しんで陰欝な月日を送るよりも、正義による新らしき生活の前途を見付けて晴々しく暮らすのが、あなたに取つても、世にとつても、必要の事と信じます。

〇渡米學生墮落の徑路

最愛の小供をアメリカに送つてある親たちと、今から送らうとしてゐる親たちの爲めに書きつける。

『米國へ行つて居る日本學生には實に勉强家と云ふものが少ない。それも實際無理のない事で、日本で想像して居た樣に生活がラクでない。誰も彼も食ふ事に追はれる。それでツイ〳〵墮落の淵に落込んで了ふのであるが、其墮落の徑路は大抵同じ樣な順序で行く。』と、記者の訪問した新歸朝の一經驗家は話し始めたが、其談話の大要はザツト次の通りであつた。

日本で想ふと、米國へ行きさへすれば、チヨツト働いても直ぐ十圓や

二十圓は取れる。生活するにはアメリカに限ると何でも自分に都合のよい様に考へて行くけれど、扨いよいよ向ふへ渡つて見ると、決してそんなラクな事は無い仕事と云つても矢張りそうで、學僕とかスクールボーイなどゝ云ふと、日本流の『先生』の玄關に小倉の袴を穿いて客の取次なぞをして寢ころんでゐられるものと思ふと大間違ひ、あちらでは先づ便所の掃除が主な仕事と見なければならない。

そこで向ふへ行つたものは必ず先づ之で非常に閉口



する。汚ない、厭だ。辛棒が仕きれなくなつて飛び出して田舍へ行く。田園勞働なら面白からうと思つてやつて見ると、どつこい然でない。身體には慣れず、勞働も可なりに激しい。此處でも長くは忍耐が出來ずに、又都會へ出て來るのだ。

けれども元々棚から牡丹餅の様な仕事はあらう筈なく、町に歸つても別段好ましい事は見付からぬそれで一日々々と空しく日を過ごす内に、小人閑居して惡い事を覺える。いつの間にか惡所に出入してゴロつく事や、遊んでゐて飯を食ふ事を習得して了ふので

ある。

こゝで又多少金廻りの好い者——例へば、多少料理などの心得があつて小金の取れるものとか、親許の送金が豊かなものとか——は如何かと云ふと、これも矢張り其の小金の爲に誘惑の機會を得て、前と同じく迅速に墮落して了ふ。

向ふには幾萬といふ日本學生が居る。それが大抵は此んな工合なのだから實に寒心に堪へぬでは無いか。

○病床の一日

長加部生

病の床にこの日永を、然も梅雨シトヽとしてそゞろ歩きに出もされず、退屈まぎれに古い雜誌など書架から引き出し〳〵見てゐると、今の民友社内に元家庭雜誌社といふのがあつて、そこから發行された家庭雜誌の第三十七號が出た。附錄の中に宮崎湖處子の「次男」といふ小說見たいなものが載つてゐる。極の荒筋をチヨツト掻い摘まんで語つて見やうならば、斯うだ。

まづ或る處に勘といふ男があつた。人を憎み、世を憤り、自暴自棄の果ては賭將棊にうき身をやつしてゐた。なぜ彼れは斯くなつたか。憐むべし、彼れは次男に生まれたのだ！父はその莫大な財產と、それに伴なふ名譽と幸福とを、長子一人に讓與し、次男たる彼れをば婢僕と等しく酷使した。長ずるに及んで彼れは怒つた。そして父の虐待に對する報いとしては、孝養を拒絕し、お情けの分配を拒絕し、自由行動を取つて近所の吉藏夫婦の娘みよと夫婦となつた。そこで勘は勘當された、が最初の間はみよの愛によつて慰められてゐた。然しつひに自覺を來たし、己れと兄との地位に霄壤の差のあるのを比較して知つた時、彼れの怨恨憤怒は心頭を突いて燃え、亂暴の行爲をなし、養父母を憂死せしめ、家財を蕩盡し、つひに妻子を連れて他村に漂泊の身となつた。斯くて彼れは勤勉から游惰に化して

仕まつたのであつた。

然し終はりに愛妻の死諫によつて彼れは再び元の實體な勘に歸つた。

これ丈けだ、文章も甚だうまくはなく、着想も陳腐なものだらうが、予は實に勘の哀れに痛哭した。同じ子として生まれながら、長子なるが故に滿幅の慈愛を與へられ、次男なるが故に漂浪の身とならねばならぬといふ理屈があるだらうか、勘が親を怒るも世を憤るも無理はない、然し今日の社會の實際は實に斯くの如きなんだ、情けない有り樣ではないか。

然るに世の所謂家庭論者は、家庭に於ける嫁の憐むべきには同情の議論をなしながら、これも憐むべき次男のためには殆んど絕えて何んにも書かぬ。予は本誌の第一巻第七號に

堺兄が「長子相續法」について痛論せられたのを見たぎり、曾てこの問題に觸れたものを見たことも聞いたこともない。アンマリ迂濶千萬な論者諸君と謂ふべきではあるまいか。が、詰まりこんな悲劇を演出さするのも、「相續法」などいふ法律があるからのことだ。世襲財産制度の世の中だからのことだ。嫁に對して千言萬語の議論も、經濟的獨立を與へてやらねば畢竟何ん等の効なき如く、次男の境遇も現社會制度を變革しない限り、救濟の仕やうもないのである。斯くて社會主義は婦人に福音なる如く、次男にも眞の福音でなければならぬ。

病床の一日はこんなことゝも思ひ廻らしながら暮れて仕まつた。

男の主張（此欄と女の主張欄とに投書を歡迎す）

●●●●●●●婦人諸君に申す

弘前市　熊谷夕照

世人は非常に結核菌を恐れてゐるが之より以上に人の心を亡ぼす虚榮心といふ精神上の黴菌を少しも恐れてゐぬ。とりわけ今の年若き婦人は大抵此の虚榮心の擒になつて居る。

若し此の虚榮に滿てる婦人と新たに家庭を建設したならば其家庭は如何に不幸であらうか。如何に悲慘であらうか。家庭の女王たる婦人が此虚榮に染まつたならば、其家庭は生命なく光明なく希望なき極めて乾燥無味な家庭に墮落して了ふであらう。

予は虚榮の擒になつた多くの悲慘な家庭を見或は聞いた。無理算段をしても表面を繕ろつたり、要らぬ見得を飾る爲に、家庭に風波を生じ、終には一家の破綻を釀すことも珍らしとはせぬ。げに虚榮は家庭の敵である。

そこで予は世の心ある婦人諸君に勸告す。殊に之より新たに家庭を經營せんとする年若き婦人に警告する。諸君どうぞ此虚榮といふ黴菌を決して心に入れることなく十分に警戒防禦して下さい。

而して眞に堅實な主義の上に立ち、眞摯な信仰を以て營まれたならば其家庭は如何に樂しいであらう。夫婦子女の情愛の純潔なるは言ふも更なり全家族の幸福は如何ばかり之に依つて增すであらうぞ。あゝ虚榮をさへ亡ぼすならば、我等は理想的家庭を建設するのは實に容易な事と信ずるのである。

敢て世の心ある婦人諸君に訴ふ。

RŌMAJI.

となり の むすめ え

しめッぽい いやな おてんき じや あり-
ません か?

Naite kudasaimasu na, sazo kuyashiku, kanashiku, haradatashiku, o-omoi deshō. Keredo, sore o omou watakushi no mune no uchi wa sarani ichibai no kurushimi to kanashimi ga ippai de harisakeru ka to omou bakari desu.

なん と もうしあげて よい やら, こんど の できごとわ. わたくし わ, さすがに おや こ の あいだがらで, いままで わ よくめ の せい か かゝど むほうな おや とわ つゆ おもわず, おりおり よくない こと を する の も ただ いちじ の あやまち で あらう, どうぞ ほんしん に たちかえッて その おこない を あらためる よう に と いのらぬ ひ とて なかッた の で ございます. その こころ も いま わ あだ! あなた の おッかさん わ もちろん の こと, あなたに も にいさん にも, わたくし わ もう ともだち の つきあい わ おろか かお お あわせる こと も できなく なッて しまいました.

Otonari dōshi no, nagai aida osewa ni nari, kotoni, otōsama no ikite irashitta jibun ni wa watakushi no chichi mo watakushidomo mo hitotōrinaranu go-on ni azukatte orimasu mono o, sono go-on o mo wasurete kondo no dekigoto !, ohazukashii kagiri desu.

ゆうべ おたく から かえッて まいりました とき, ちち わ どろんけんに たべよッて ぜんご の しょうたい も なく なに か ぐずぐず しやべり ながら ねて しまいました. あんな こと が あッた こど と わ ゆめにも しらず に おりました のに けさ この こと お しッて じつに じつに おどろきいりました.

Otōsama ga okakureasobashite kara tada kengo ni, tada kedakaku misao o omamori ni natte iru sono okāsama o, hito mo arō ni, okasu to wa nantoyū nasakenai chichi de gozaimashō! Ikani yotte wakimae o ushinatte ita to wa ie, asamashii kokorone ni wa aiso mo koso mo tsukihatemashita. Kesa wa okāsama wa dōshite irasshaimasu? Mi mo yo mo ararezu sazo kanashinde irasshaimashō.

わたくし わ この こと お しッた ときに, このちくしょうどう に おちた ちち お ひとおもい に ころして じぶん も はじ おほき うきよ から のがれよう と おもいました が いくじ の ない わたくしにわ それ も できず, おめおめ と ちち おいかし, わたくし も ちくしょう の こ と して いきはじ お さらして おります.

Omouni, chichi wa anata no ie no zaisan ni me ga kurete kayōna koto o shita no de gozaimashō. Watakushi no tokoro wa, seken no temae koso wa, otaku yori zaisan ga ooi yō ni miemasu keredo, atchi no kaisha, kotchi no kabu to te o dashite, iwayuru shinshi shinshō no tsukiai o suru futokoro no kurushisa wa ohanashi ni natta mono de wa arimasen. Sore kara mimasu to otaku nado wa donna ni shiyawase de irasshaimasnō, tsukiai mo harazu, dezu irazu no okurashi nandesu mono! Sore o chikushō no chichi ga mikonda no de gozaimashō, okāsama sae te ni irete shimaeba otaku no zaisan wa katte ni dekiru to, kō kangaete okāsama ni iroiro to iiyotta no de gozaimashō.

ところが おかあさま わ どうしても これ を しょうちなさらない. そこで ゆうべ の ような ちからずく の らんぼう お した の で ございましょう. ちち が どう おもいました とて わたくし わ いのち に かけて そんな こと わ させません. いずれ のちほど うかがッて おわび お いたします.

Chōsen no kokuō ga naite kurai o yuzutta to yū gōgai-uri no suzu-oto o kiki nagara,

"Seigi" yori.

○小品 大戰爭

微瀾生

けふも毎朝の例で、神樂坂から外濠線に乘ッて、常盤橋までは脇目も振らず新聞を見て來たが、こゝでは降りる客が多くあッて、車室ががらり急に淋しくなッたので、却ッて四邊を見廻す氣になッた。丁度お婆さんと女の子とを伴れた洋服男が入ッて來て、僕の前にゴト〱と竝んだ。他にも空席はあッたが、其處が御者臺にも近くて、位置としては寧ろ好かッたので—。勿論、僕は其反對の側の一端であッたと想ひたまへ。車が動き出すと、車掌が切符を切りに來た。僕は此時まで—混雜を避けて—切符を切らせてもゐなかッたので、先づそれを切らせやうとすると、僕より早く新客　洋服男が手を出して、彼等三人分のを買ッた。途端に！車掌の鞄から、ひら〱と音もせず、小さい紙片が落ちた。落ちたのを見ると、それは白い、小さい紙片ではあッたが、確かに僕の眼には電車の半切符と睥まれた。さもしい心の白狀だが、まだ鋏を入れた痕がない。これがひら〱と散ッて、白く點付けて地に落ちてゐるのである。僕は最う自分の切符を切らせることを忘れてしまッた。—斯う白狀する時にでも、全く忘れてしまッたのであると言ふ。—殊更に控へたのではなかッた。蓋しまだ深いたくみが萠してゐなかッたゆゑであらう。さうして落ちたのには、誰も眼を止めぬらしかッた。尙ほ今も認めぬらしい。僕は手に持つ新聞を讀む氣を取られてしまッた。之を拾はうか、誰も知る者はない、誰も見てゐない。又落ちたのも、落ちてゐるのも知らぬのだから、今それを注意してゐる者もない。僕は之を拾はうか、知ッてゐる者は僕ばかりである。それじや拾はう？何うして拾はうか。顏をあげたまゝで脚を伸して掻き寄せやうか。をかしい。ソッと俯向いて、何氣なしに拾はうか。それは出來にくい。新聞を落した體にして、さうして拾はうか。拙かッたら一層をかしい。が車掌も外を向いてゐる。乘客もそれ〲思ふ所を向いてゐる。新來の三人連も、ちッとも之には氣が附かぬ。拾はうか、早く〱！拾ふなら

ば今である。まだ迷うてゐる。イツソ自分のであるらしい顔をして、それが何時か知らぬ間に落ちてゐたのを突然氣附いた風に裝うて、アツとでも聲を掛けて撮み上げやうか。それも變に體裁が惡いに違ない。今の内ちッと沓の尖ででも壓へてゐて、誰もゐなくなッた時、心許して拾はうか。それは駄目である。僕は最う八重洲橋で降りなければならない。と斯う盗み取らう、拾ひ上げやうと云ふ心たくみと、取ッては怪しまれた時きまりが惡い、取ッても自分の心咎めがするであらう。イヤ怪しまれる筈はない—誰も知らぬのだから。心咎めも忍ばれやう—自分のものになッてからだから。殊に今直ぐに使ッてしまへば、それまでである。

が併し拾ふ今が恥づかしい、と云ふ惑とで、心の裡は—小さい、さもしい心の裡は、ヤツサ、モツサの外には見るべからざる大戰爭である。エ、無益しいことを考へた！と憤然起ち上がッて、御者臺の方から出やうとすると、今度はポッケットの半切符奴、此刹那の際にも不服を唱へて、俺を使はなくてもよからう。さきの代人がゐやう。と極めて口早に呟く。僕は『オヤ切符が？』とうしろを振り向いたが、代人となるべき彼に目を與れる惡黨的勇氣はなく、『有ッた！』と口の内で良心が答へて、取り出す奴を御者に渡して、追はれもせぬに一散走り！

○非調和（ノーコンプロマイズ）（妻君百種の内）

根津峰子

貴下いつまでグウ〱寢てゐるんですよう。先刻もう八時を打つちやつたぢやありませんか。お湯が沸つて御飯が冷えて、掃除も出來ず、片付ける事も出來ず、お客でも來たらどうするんですよ。そろ〱起きやうかぢやありません。さつさと起きて下さいな。見つともなくつて仕樣が無いぢやありませんか。昨夜遲いから仕方が無いですつて、馬鹿を仰しやい。誰が遲くなつて下さいツて賴みました。御自分の勝手で遲く歸つて置きながら。大方好な女の所へでも寄つて來たんでせう。馬鹿々々しい。そんな事は無いッて？嘘ばつ

かり言つて、善ござんすよ。さあ、さつさと起きて下さいな。今時分寢てゐる人が何處の果にだつてあるもんですか。波斯あたりは未だ夜中だですつて、よござんす、何とでも澤山言ひたい事を仰しやい。

おや、とう〳〵貴下は坊を起して了ひましたね。何だつて今時分眼が覺めるんだらう。あゝやかましい。そんなに泣いたつて仕方か無いぢやないか。私だつて泣きたくなつちまふわ。ご用も何も出來やしない。お默りツてばやかましいね。まあ、此子はどうしたつてんだらう。おゝやかましい。耳も何も破けてしまふ。チヨツ、お默りツて云ふのに些とも默りやしない。自烈たい。えゝ、そんなに泣くなら勝手におし。亂暴な奴だツて？何時私が亂暴にしましたよ。貴下まで赤ん坊の肩を持つて、私を苛めるんだもの。投げ出しやしませんよ。餘り泣くから傍へ置いたばかりぢやありませんか。あゝ嫌になつちまふ。何から何まで私ひとりでしなきやならないんだもの。

牛乳屋さんかい。何だつて今日に限つて此樣に遲く持て來るんだい。そいだから坊が泣いて〳〵私ややりきれやしないよ。人の氣も察しずにプラ〳〵車を挽つ張つて遊びながら配達してゐるんだらう。然で無い事は無いよ。さもなくて此樣に遲れるものかね。もう彼是九時になつちまふ。お晝御飯に間に合ふばかりだ。私の處ぢやモウ要らないから持つてお歸り。えゝやかましい坊だ。そんなに牛乳が飲みたけりや、自分で這つてつて飲むが善い。あゝ要らないよ。さつさと持つてお歸りと云つたら。

何だい間拔面をして今時分お早うも無いもんだよ。新聞配達つてものは夜あけ時分にやスツカリもう仕舞つて了ふべきものだよ。ほんとに氣の利いた化物の引込む時分に。うちぢや新聞が欲しいんで、古聞なんか要らないから、もうお前さんはお斷りだよ。今日一日ですから勘辨して下さいつて？勘辨なんて私や知らない。勘辨なんぞする位ゐなら、三遍まはつて煙草にするよ。左樣なら。もう明日から要らないんだよ。

あゝ八百屋かい。おいお鍋や。いやになつちまふね、未だ歸らないん

だもの。ちよいと使ひに出しや三時間半ぐらゐも掛つて了ふ。八百屋さん少し待つといで。坊が泣いて仕方がありやしない。貴下何故抱いてやつて下さらないんです。早く起して下さいな。あんな厭な顔をしてさ。そんなら願ひませんよ。よこして下さいな。え丶やかましい。お默りッてば、お默り。お默り。未だ默らないか。あア情けない。些とも默りやしない。乳をやらないからだッて？此通りやつてますよ。まあ何てグズ〳〵してゐるんだらうお鍋は。あ丶漸と歸つたのか。何だい、下女の癖に、リボンなんか挿したりして。何をして居たんだい。好い加減にして歸るもんだ。お前みたいなドヂはありやしないわ。いくら山出しだッてモウ少し氣が利くもんだよ。表に八百屋がゐるからね、澤庵を一本お買ひ。それが一本五錢ですッて？まあほんとにお前は馬鹿だね。馬鹿にされるのも好い加減にしてお置よ。然う云つておやり八百屋に、之は二錢五厘で好いッて。然う云はずに、四錢五厘に買つて下さいッて？馬鹿をお言ひ、面倒くさい、要らないッて言つて追返しておやり。

馬鹿だねお前はツク〳〵。此の大事な大事な急須を破るッて事がありますかよ。私はこんなに大切にしてゐたものを破られる位ゐなら死んで了つた方が増だ。手が滑るッて事があるもんか。お前が落さうと思つたから落ちたんだよ。い丶よ、私の言ふ事を馬鹿にしてゐるから、とう

〳〵此う云ふことになるんだから。あ丶あ丶急須を破はして貰ふッて下女は雇つて置きやしなかつたのに。許して下さいッて？蟲の好い事をお言ひで無い。許したり我慢したりする事が出來る位ゐなら、こんな事を言やしないよ。

貴下は今日何處かへ行つしやるッて言ッてましたね。此の忙がしい世の中に、氣樂さうに遊んで歩かなくたッて宜ささうなものですのに。一體どこへ行くんですよ。鎌倉へですッて？おたのしみですねえ。馬鹿を言へッて？馬鹿ぢやありません。貴下ばつかり誰かと手なんぞ引きあつて、遊び歩いてゐて、私は眞黑になつて燻ぶつて、坊に責められてばかりゐてマショクに合ふもんですか。

だつて自分の用ちや無いから仕方が無いツて？好い加減な事を。何處の社に其様用事があるもんですか。貴下が行くなら私だつて箱根へでも遊びに行つてやるから宜いわ。旅費を貰つてゐらしつたでせう。半分置いて行つしやいよう。いゝえ、貴下はそれで澤山です。駄目だつて？何が駄目な事があるもんですか。置いてツて下さいツてば。アラ、御飯も食べずに洋服を着たり何か、どうするんですよ。まあ呆れて了ふ、此人は、もう出掛けてツて了ふんだもの。

＊　＊　＊　＊

日が暮れて夜が明けて、妻君不平の内に翌る朝になつて了つた。そしてお望みの通り、今日は牛乳屋も來ず、新聞屋も來ず、八百屋の聲は二軒ばかり向ふを素通り。

お鍋孃は昨夜の内に暇を取つて宿へ下り、鎌倉へ行つた良人は遂に歸らず。

臺所には蜘蛛が巣を張り、門前には雀羅を張る。

ノーコンプロマイズ夫人萬歳！

○隨筆　一筆庵

石屋の彌陀六、久しく只の親父で居たが、先達てフト深尾君に訪れ浮世話の末を本誌に繫いで、俄かに何かカキ給へと迫らる。至極だしぬけの注文に畏却したれど、負惜みの本性思案に及ばず、人困らせの隨筆ならばやるべしと迂らしたるに、イヤ苦しからず、谷の古木の高くとも、峯の小松に影はさゝぬと、蒟蒻屋の問答めいた事を云はれる。さらばやる可しとした處で、思ひ出のまゝなれば、引眉毛の再勤者を誤まつて出すやも料り難しと云うに、いや〳〵それも苦しからず、借る八合ナス一升の腹太にせよとある。遂に逸るゝに途なく、其晩から干からびたる筆の穗を咬みて、まづ最初に浮世畫師の往時話し。

◎芳年翁の或時。

月岡芳年翁は、箱庭を作るにも亦た頗ぶる妙を得たる人。或時僕等五六人呼れて拜見を許るさる。其頃の翁の宅は淺草の新須賀町、あまり廣からぬ家と覺え居たり。されば二十餘の箱庭の爲、座敷は殘らずふさげられ、中庭にまで置ならべられ、實に

寸隙もなき有樣。つく〴〵みるに、そつな物は一ッもなく、取分けて結構なりしは、山王祭禮の猿鳥の花車と、其警固等が行列して、九段の牛ケ淵を登りゆく處「ナンだつておめへ、此手古舞の人形一ッが一兩ッも掛つタンだ」と大自慢、此一箱だけでも、百圓ぢかき物ならんと許し合たり。眞以て精巧の出來、見詰れば見詰るほど、我も其群の中に居る心して、笛太皷の音も聞える樣に思ひたるが、今は其空箱もあるまじ。

◎芳延翁の或時。

松本芳延翁は、俗に田圃の芳延と云はれ、即はち淺草の田圃に住み、其庭の樹立の内に一疋の狸を飼ひ置き折ふし人に見せて之も大自慢



或時翁が小袖の上に、あづしの極よいのを被て、片手に澁蛇の目の傘、片手に大きな鰒を提げ、いてふ齒の高いヤツで、並木の通りを行くを見たるが、眞に生粹の江戸兒風は之でありたり。世には此翁をも芳年翁の門人と云ふ者あれどさにあらず、ともに國芳翁の兄弟弟子也しと云ふ。

◎年信子の或時。

田口年信子は、本郷邊の八百屋の子なるが、幼少の時、或提灯屋の弟子小僧となり、提灯に繪を描きし處より、畫工になり度の心を起し、のち芳年翁の門人となつて、大坂さきがけ新聞に甫めて挿繪を描く。此人の奇行は殆んど數ふるに遑なけれど、其中にも或時師の

翁の下繪を殘らず持去り、關西へ逃げたれば、遂に師より破門せらる。後年京都の或煎餅屋の二階で故人となれり。又此人の繪の奇骨に富しは迚も僕らの云現はし得る處にあらず。今の根岸の胡蝶園若菜氏が秘藏なるエンマ王の木版と、楠公の十勇士の三枚續き大錦の下繪を見ても知るに足るべし。惜いかな夭死して、其筆意は僅かに今の萬朝の信一翁に遺るのみ。當今尚息才ならば嘸かしとぞ想はる。

◎年貞子の或時。

山田年貞子も、芳年翁の門人なりしが、絹物の彩色は翁よりも上手なりしと云へり。ツイ先日故人となりたる大坂の稻野年恒子も、此人に就て彩色を學びしが、祇園の舞子が羽根をつく處を繪どりしに、如何しても旨くゆかず、年恆、遂に業を棄して京都へ走り、梅嶺翁の門に入りたることあり。年貞子は今の歌舞伎座の繪看版も度々かいて、其彩色の妙を現はし、大ひに好評を取りたる事もあり。又此人は北條の坊樣よりも犬好にて、曾て築地に居た頃、或時そのアカと云ふ犬が、近所の子供に咬つき、巡査が犬殺しをつれて來り、其アカを出せと云ふに、年貞ズッとそれへ直り「アカを殺すなら、まづ吾輩を殺して後に殺しなせへ」と云張り、如何しても犬を出さず。妻君お豊さんも樣々に詫をしたれば、巡査も果は苦笑ひして去りし事あり。時に年貞、夜具戸棚よりアカを抱いて出し、かたはらに居たる僕を見て酒氣を吐ながら「世間では余を犬氣違だと云ふ想だが、シカシ余に云はせると、誠のない友達よりも、犬の方が餘ぽど增しだと思ふ」と云たり。之も今は故人の數に入り、子供もなく何もなく、跡は後家樣ばかり。

僅か以上の諸氏だけでも、まだ〵〵奇談は多くあれど、他の諸氏のを一巡して後に又記さん。

◯僕の今昔

麻布　牛歩生

本鄉の穢い六疊一間の裏長家に、母と僕とが住んでた時分、近所の人は『三ちゃん々々々』と僕を呼んだ。蓋し僕の名が三之助であるからだ。そして僕の母をば『三ちゃんのお母さん』とか若くば單に『お婆さん』と呼んで居た。每日來る八百屋や魚屋は『おッ嬶ア』とか『オイお內儀さん』とか言つて『高かねへせ、買つときねへ』なんと言つていた。僕は朝夕の外餘り多く外出もせず、生來の怠惰者だから水汲みに出た事もなしに、家に居るとゴロ〵〵寢て計りいたものだから、長家の婦人連、大工、車

夫の叔父さん達から『三公の變り者』とか『三的の無性野郎』なんて難有い蔭口を頂戴していた。

其後僕は七圓といふ高い家賃—收入から比較すると高い家賃—の現の麻布の家へ、住ふ事となつた。すると僕は『三ちやん』が一躍して『旦那』若しくば『御子息さん』と變つて來た。『三ちやんのお母さん』『お婆さん』と呼ばれた母が『御隱居さん』と變つて來た。『お母ア』なんと言ふ怪しからぬ八百屋も來なければ魚屋も來ない尤も相變らず無性の僕は『三的の無性野郎』の蔭口を戴いてゐるか如何か、それは分らない。

兎に角僕は三之助であるから『三ちやん』と呼ばれたとて侮辱された譯ではなし、別に不思儀はないようなものゝ、扨て『旦那』と言はれると何とはなしに氣持がいゝ。如何やら急に自分が偉くなつたような心地がする。母に對する『御隱居さん』も『お母ア』『お婆さん』よりは聞いてゐて嬉しい感じがする。其處でソロ〳〵淺薄な虛榮心が頭を擡げ出して、酒屋の御用聞きや、米屋の若者に威張つて見たくなる。それは虛榮に違ひない。違ひないと知り乍ら、一寸肩を聳かし、反り身になつて、尊大に構へて見たくなる。人間て奴、始末に了へない。

何も自分が尊敬せらるゝ程に急に偉くなつた譯ではなし、よし偉くなつた處で威張る事もない譯だ。僕は大學者でもなく、大思想家でもなく、大事業家でもない。未だ社會に何の功益をも與へた覺へもなく、數年前から依然たるさゝる役所の最も薄給なる腰辨である。お耻しいが人民の租稅に寄食するお役人樣の端くれである。貧困に至つては敢て自慢ではないが。裏家時代と變つた事もない。

たゞ穢い裏家が今のや、清潔な、間數の二つ三つ多い家と變つただけで、母は矢張り昔の母、僕は矢張り暗愚の僕だ。

要するに母に對する『御隱居さん』僕に對する『旦那』の意味は畢竟母と僕に言ふのではなくて『住居』其ものに拂ふ尊號に外ならぬ。裏家の『三ちやん』と今の『旦那』と赤裸々の僕に何の價値の相違があるだらう。何の階級、何の輕重があるだらう。若しそれ僕が明日にも元の裏家へ引移つたなら『旦那』の敬稱は直に消えて再び『三ちやん』と呼ばるゝであらう。野郎呼はりをさるゝであらう。母は『御隱居さん』の名義を剝奪せられて再び昔の『お婆さん、お母ア』に還へる事であらう。

○讀者の領分

●農家の家庭を改良せよ

埼玉縣　深井武司

◎農家の家庭　家庭の盛衰は多くは主婦其人の人格修養の反映であるが、現今の女子教育は全く農村の家庭を眼中に置いてない。殊に大多數の小作農の家庭などは全く敎育の賜を受けて居らぬ。而して其結果は實に寒心すべきものがあるのだ。

◎農家の家庭敎育　吾人は生長するにパンと牛乳のみではない。若之ればかりで生長させたとならば、それは動物育兒法である。原人の育兒法である。然るに之は無敎育なる農家に通有な事で、小供が生まれてから大人になるまで、食物を充分に與へさへすれば、親の義務を盡したやうに思つてゐる。彼等は如何にして兒童を敎育すべきなどゝは嘗て考へぬ。されば勿論子守の選擇などに注意する筈が無い。で知らずく小供を惡の方面に導いて了ふ。搖籃を動かす人は天下を動かすと云ふ事があるが、宜しからぬ動かし方をされた兒童の前途は恐るべきものでは無いか。

◎農家と衛生思想　更に別の方面から觀察して見ると、第一に心付くのは衛生思想の無い事である。農家に行つて見ると、よく上草履がある。普通の上草履といふものは疊や板の間が汚ないから足を汚さぬ樣にといふためであるが、農家では足が汚ないから疊を汚さぬ樣にとて草履を用ふのである。是はつまらぬ事であるが、衛生思想の無い一證據ではあるまいか。又厠や厩などの臭氣も彼等は別段氣に留めぬ。留めぬ計りなら未だしも、臭くなければ肥料にはならぬと云ふやうな迷信を持つてゐる。誤まれるも甚だしいでは無いか。臭氣はアンモニヤの飛散で、つまり肥料分の減少を意味して居るのである。之に木灰なり石灰なり進んでは石炭酸、綠礬若くはクレシンでも撒布すれば、臭氣も止まるし、衛生上からも肥料としても善い。然るに農家は之れ位ゐの事をも知らぬ。それから蚊、蠅、蚤、虱などの厭ふべきものも一向平氣で發生させてゐるが、醫學者は是等の昆蟲が、マラリヤ、ペスト、コレラ、結核、等の恐るべき疾病の媒介者だと云つてゐるのである。又よく農家では何處の病人はお米を食べたが死んだとか、藥を飲んだが死んだとか言ふが、之は全く疾病につきての觀念がないからである。九分九厘死んだ病人が米や藥で生きる道理が無い。彼の肺病！部鄙の別なく頗る激烈であるけれども、農民の肺病となるや、僅かに痰が腐つて出る位ゐにしか思つて居ない。それであるから其蔓延力も亦甚しい。

その他、料理にしても何の考へもありはしない。三十年來お國自慢の米麥と味噌汁と菜葉燒魚である。ドクトル、ベルツが日本人は三千年來米を食ふが未だ其食ひ方を知らぬと云つたのも道理である。云ふまでもなく農家は料理材料を得易いのであるから、少し心得さへあれば、必らずしも三度同じ樣なものを食ふにも及ばぬのだ。「情けない哉土百姓に生れ、厭な麥飯食ひなろた」と嘆ずる勿れ、幷は各自の勝手、自業自得と云ふべきである。現今では德川時代の樣な「百姓は麥を食ひ、牛馬同樣相働くべき事」なんて規定は無いから、大に安心して珍味を口にすべしだ。

◎農事改良よりも急也　農家無敎育の結果は前に述べた通りである。われ等は唯形骸的學問ばかりで家庭改良の遂げらるべきもので無い事を知つてゐるが、然し敎育は最も必要なる一條件であらう。世人は農村改善とか農事改良とか云ふが、家庭改良は更に其れよりも必要の急に迫つて居る。われ等は敎育家、家政學者、其他の人々が農家の家庭を忘れて色々の事を言ふのを見て、殆んど呆れるの外は無いのである。

●夜の田舍町

玉菊

或る夜予は少しの用事で田舍の町へと出かけた。日は既に暮れて滯墨を流した樣な雲、その中に二つ三つの星が見えてゐる。田舍の事とて

もう人通りの無い道路に沿うて小さな沼がある。その沼の向ふに墓場があつて、そこに燐か螢か異様な光りが見える。こゝを通つて了ふと、やがて此町の華とも云ふべき機業場の前に來た。機械の音は止んでゐて、當番の工女でもあらう話聲が聞こえる。予は工女の身の上を考へながら歩むとしもなく警察の前に出た。薄暗い赤硝子のランプが力なく光つて、見張りの巡査が門に立つてゐた。あゝ巡査も工女と同じく憐れな人間だ、などゝ考へるトタンに耳に入る聲に驚いて目を擧げると是なん此町のジブラルタル海峽、煌々たる軒燈の光りに即席御料理の看板が明かに讀まれる。樓上には早や捕虜の酒宴が賑かで、今しも別の青年艦隊が通過するを見付けて新たなる砲門が開かれた。艦隊は直ぐ捕虜になつて二階に引上げられる。すると妓軍は凱歌を奏してゐる。こんな物騷の世の中だから矢張り巡査の必要もあるのだ。

そこを通つて了ふと、兩側の客も見えぬ店はアセチリン獨り時得顏に光つて店番はもうコクリ〳〵座睡りをしてゐる。あゝ是が田舍町だ。向ふに歌の聲がするので見れば之は地獄屋、軒燈暗く川鍛と亂れ書が見えて例の見張斥候がゐる。危ないと通りぬけた向ふは仕立屋、新夫婦が頻りに話しながら仕事をしてゐた。邊りには小雨が降り出して町も野も人影は全く無い。例の料理屋でもペンともシヤンとも言はぬ。くらい空に唯一聲ほとゝぎすを聞いた。又小草の陰で螢の光りを一つ見た。かくて歸宅して閨に入つたが、不如歸の聲が耳に殘つて眠る事が出來なかつた。予の境遇はほとゝぎすと同じであるからである。

●田舍のたより●●●●●

どなたか知らないが態々信濃から手紙を寄越されたり、面白いから載せる　（記者）

用事とて無いが何か書いて見やう、物好だね、誰か見てくれゝば三錢郵劵も浮ぶ譯だ見なくとも仕方が無い、江戸と此處では喧嘩もなるまい、東京は暑いでせう、もう白地の浴衣、麥稈帽など埃の中に動くでせう、種々に彩られたる廣告が日に照らされてイヤに氣になるでせう

そこへ來ると僕の今居る所は好いですぜ、靜だよ、都の臭味は藥にしたくもありやしない、滿目皆綠さ、てうど翠色の蚊帳の中に居るやうな氣持だ、前に聳えてゐる大岩山は山毛欅で蔽はれ、其下を中津川(流れて千曲川に合し新潟へ行くのださうです)が紺碧の水を湛へてドー〳〵と流れて居る。

都人が想像したら仙境とかぬかすだらうが僕はいやになる、郵便局へ六里餘（まアちよつと東京横濱間ですナ）しかも此道が四尺幅の一上一下羊腸崎嶇とか云ふのでせう、配達が二日或は三日に一度と云ふ有様、たつた今新裝を凝らした家庭雜誌第九號を手にした嬉しかつた地獄で佛、早速繰ひろげた、一氣呵讀しようと思つたが……二つ三つ見ておいて今此の手紙を書き出したのだ、『となりの厠』おもしろい、いつかの「新佛教」にあつた「夜の音」と題して宿直の夜の有様を書いたのと、ちよつと似て面白かつた。新佛教と云へば其讀者に（名前は忘れたが）便所の好きな人があつた、僕も便所が大好きよ……長糞は自慢、早くて十分、時によると家庭雜誌一册ぐらゐ讀む、世人は朝飯前と云ふが、僕は糞たれ時間だ

週刊平民新聞時代に便所にノートブツクを置いて、入る人毎に感想を書付けたと云ふが實に巨案だ、僕も他日家を持たば行ひたいと思ふ……

兩性問題いつも非常の興味で讀む今度の情慾教育結構だね、今になつて獨、瑞あたりで喋ぎ出したのですか、僕は歐羅巴の人は偉い〳〵と思ふたが少し買ひ破つた、呵々

身の上をさらけ出して助言を願ひたいが此次にしよう

せう樣、ローマ字は見てゐるよ、僕ばかりでもあるまい……

僕は二三日中に信越の國境に上り、漸次南へ向ひ上州界を踏み破り草津へ下るつもりです、道を行くのぢや無いですよ、此延長距離豫想一萬五千間……天幕生活の打續け、天候の如何により幾何の日子を要するか未定（信越の國境高く聳ゆる苗場山下にて、千山萬岳樓丁稚）

○強い裁縫師（二）

深尾韶

天子樣は人を裁縫師の所へやつて此う言はせました。『これから少し行くと其處に大きな森があつて、二匹の恐ろしい鬼が住んでゐる。その鬼は大變亂暴な鬼で、時々村へ出て來ては人を殺したり、寶物を剽つて行つたり、田畑を荒らしたりする。けれども一人として之を制する事も出來ず、それに近よる事も出來ないが、もし貴下が鬼を征伐して殺して了つて下さるなら、其御褒美に此國の半分だけの地面と、若い美しいお姫樣をお嫁に上げませう。そして貴下が征伐に行く爲に、もうチヤアンとお伴の騎兵が百人だけ用意してあります。貴下はホントに強い事を皆なに見せてやる爲に、必と此役目を勤めて下さるでせう。』裁縫師は心の內で、『面白い！天子樣の娘と國を半分、こりや惡るくない。こんな旨い事は每日でもあれば善いなア。』と思ひましたので、此う返事を申しました。『宜しい、直ぐ退治てまゐりませう。そして騎兵なんぞは要りません。一打で七人の私が、たつた二匹の鬼に怖い譯は無いぢやありませんか。』

併し強てと云ふので、裁縫師は百人の騎兵を連れて出掛けました。が、森の入口まで來た時に、騎兵に、『お前たちは此處で待つてお出で、鬼退治は私一人で澤山だから。』と云つて、裁縫師は森の中に飛込んでまゐりました。

右左に氣を附けて暫らく行くと、直に鬼を見付けました。二匹の鬼はサモ心地よげに、木の下で前後も知らずに睡つて居るのです。其鼾の大きなことは！木の枝が一息一息に搖れ動いてゐます。

裁縫師は大急ぎで石を拾つて、カクシを皆な一杯にして、傍の木に攀ぢ登りました。そして丁度鬼の頭の上に出てゐる枝の上へ座つて石を一つ〱鬼の寢てゐる胸の上に落してやりました。一匹の鬼は夢でも見てゐるのか、初めの內は口の內で何かブツ〱言つてゐましたが、とう〱目を覺して、モ一人の鬼を押しながら、『何だツて俺を毆るんだい

！」と腹立たしげに申しました。「馬鹿ア言つちや不可い。そりやお前が夢でも見たんだらう。毆りもどうも仕やしない。」と答へたので、二匹は又そこへ横になつて睡り掛けました。すると、裁縫師は今度は別の方の鬼へ石を落しました。鬼は又驚いて、『何だ、何をぶつけるんだ。』と片方の鬼に喰つて掛りました。『俺は何にもするもんか。ヘン汝が夢なんか見ておきやアがつて。』こう云つて二匹は喧嘩を始めましたが、やがて夫も疲びれたと見えて、又睡つて了ひました。

　裁縫師は今度は一番大きな石を摑んで、前の鬼の胸へ力一杯に投げ付けました。『餘りの事をしやがる。默つてゐりやアー！』と鬼は跳起きて氣狂の樣に片方へ飛付きました。一方も夫を防がうと思つて、一生懸命になつて戰ひましたが、その光景の恐ろしさ！木は踏み折られ、枝は嚙み裂かれて、まるで暴風の跡の樣。そして二匹ながら血みどろになつて死んで了ひました。

　之を見すました裁縫師はソロ〳〵隱れてゐた塲所から下りて來て、『マア仕合せだつた。俺の登つてゐた木を裂かれやうものなら、可愛そうに人間樣の俺は、木鼠の樣に跳ねて逃げなきやならなかつたんだ。』と笑ひながら刀を拔いて、兩方の鬼の胸を二三度えぐり、さて騎兵の所へ來て申しますには、『さア仕事は濟んだよ。二匹とも酷い傷を負はせて置いたから今頃はモウ死で居るだらう。

併し隨分骨が折れた。向ふで無闇にジタバタして木を折つたり枝を裂いたりして防いだので。けれども俺の樣な一打七人の人に逢つちや、いくら騷いだつてダメな事さ。』

『別段、お怪我もありませんでしたか？』と騎兵が尋ねると、裁縫師は落付き拂つて、『どうして。憚りながら髮の毛一筋でも觸らせるもんか。』けれども騎兵たちは未だ疑つてゐたので、自分で森の中を檢めやうと、馬を木の間に乘り入れると、驚きました、森の中は血が川の樣に流れて、鬼が其中に浸つてゐるし、四邊は根こぎになつた木や裂かれた枝で一杯になつてゐるのです。

　そこで裁縫師は騎兵をつれて歸つて、約束の御褒美を下さいと、天子

樣に申しました。ところが天子樣は裁縫師が無事で歸つて來たので、約束をした事を大層悔み、どうかして此の強い人を殺して、約束を反古にして了ひたいと思ひました。『貴下は私の娘と婚禮をする前に、モ一度えらい事をしなくてはなりません。それは彼の森にモ一つの怪物がゐて、頭には尖つた一本の角を生して、其處ら中を飛廻つて惡さばかりするのです。それを是非捕へて來なければなりません。』と申しました。裁縫師は、『ア、困りましたね。二匹の鬼でさへラク過ぎて困つたのに。私の格言は「一打に七人」て云ふのですからね。まア仕方が無い、行つて來ませう。』と繩と斧を持つて出掛ました。

相變らずお伴の者には此處で待つて居る樣にと命令けて、自分は森の中に這入つて行きましたが、すぐに其の獸が現はれて、勢ひ鋭く突き掛つて來ました。『ゆつくり、ゆつくり、そう迫くな。』と裁縫師は巧く身をわきへ外らせて大きな木の蔭へ隱れましたが、獸は怒つて非常な勢ひで木に突きかけました。ところが餘り力を入れて突いたので、其角がシッカリと木の幹へ刺つて了つて、どうしても拔けません。『どうだモウ逃げられまい。』と云ひながら、裁縫師は木の蔭から出て來て、先づ繩で獸の頸を括り、そして斧で木から角を離して、命令かつた通り、天子樣の前へ牽いて來ました。

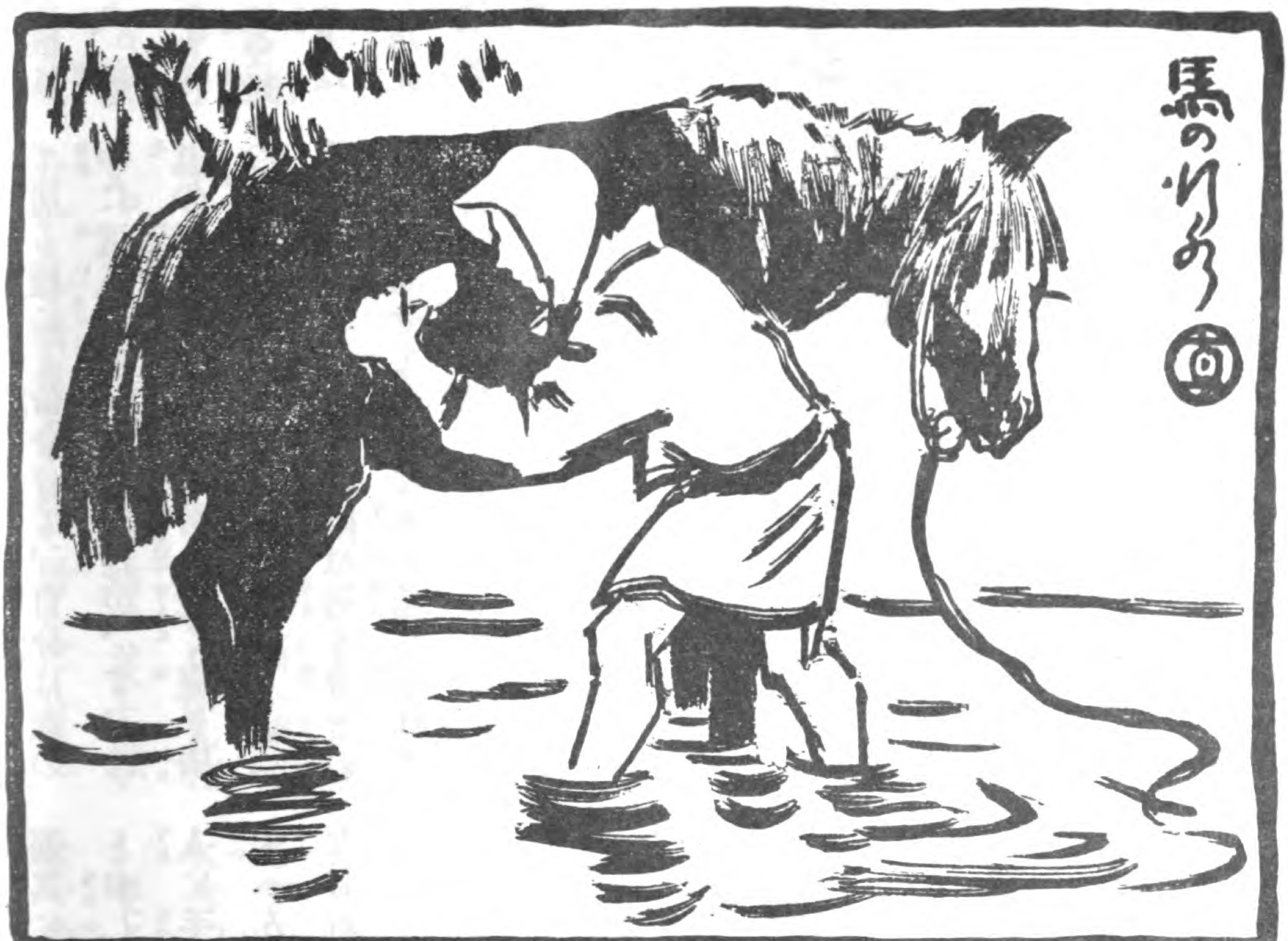
ところが天子樣は未だ約束の御褒美を下さらないで、婚禮前にモウ一遍眞に勇氣のある證據を見せてくれと申しました。裁縫師は今度は、狩人に手傳つて貰つて、國中の作物に大へんな害をしてゐた荒野猪を捕へなければなりませんでした。

『よろしい、そんな事は小供の惡戯よりも譯は無い。直ぐ出掛けよう。』といつて、野猪の居る近所まで行くと狩人をそこに待たせておいて、自分ばかり進んで行きました。狩人たちは元々この荒い獸に懲りて居たので、途中で待つてゐる事を喜んでゐました。

野猪は裁縫師を見るや否や、牙を露出し泡を噴いて、恐ろしい唸り聲を出しながら、唯一擊と跳掛りました。けれども輕捷い裁縫師は直に身をかはして、いきなり近所にあつた

番小屋に驅け込んで、向ふの端の窓を跳越して逃げ出しました。野猪は直ぐ跡を追つて小屋に入りましたが、此時、裁縫師はモウ一廻りして戶口へ來て、外からシカと戶を〆めて了ひましたので、體の重い野猪は窓から跳出す事も出來ず、戶口からも出られずにとう〱生擒にされて了ひました。裁縫師は狩人たちを呼んで之を見せて、自分は其足で直に天子樣の所へ歸つて、今度こそは約束通りにして下さいと迫りました。

　で、天子樣も仕方なく、お姫樣と結婚する事を許し、その持參金として國の半分を分



けてやりました。婿になる男が裁縫師だと知つたら、天子樣は必ともつと嫌つたに違ひありませんが、そうとも知らず婚禮は立派に樂しく取行はれました。貧乏な裁縫師からとう〱一人の王樣が出來上つて了つたのです。

　幾日か經つた或晩の事、若い皇后樣が聞いてゐますと、良人は頻りに寢語を言つてゐます。而もハッキリと『オイ小僧、早く來な。此のチョッキを縫つて、それからズボンを仕上げて了ふんだ。確乎しろよ、グズグズしてゐると、此物指が

イヤと云ほど汝の尻邊へ衝突るぞ。』
之を聞いた皇后樣は吃驚して、翌る朝すぐお父さんに此事を話し、良人は身分も無い賤い裁縫師に違ひないから、どうか別れて了ふことの出來るやうにして下さいと願ひました。そこで天子樣は娘を出來るだけ十分に慰めて、今夜は其處の入口の戶を開けておく樣にと命けました。『そうすれば彼の人の寢付くまで人を戶の外へ忍ばせておいて、寢たら縛つて舟へ乘けて遠くへ流して了へば、もう面倒くさい心配は無い。』

若い皇后樣は此話しを聞いて大層喜びましたが、一什一伍を聞いた侍從武官は平生大變に若い王樣と仲善なので、直ぐ此事を話しますと、『よしよし、そんなら一つ向ふの計略を蹉らしてやらう。』

そこで其晩も平生の通り床に入りました。暫らくすると皇后樣はモウ良人の寢付いたものと思つて、ソツと起き上つて入口の戶を開けて來ました。けれども裁縫師は寢たふりをしてゐるので、大きな聲で呼び始めました。『おい小僧！小僧！此上衣を縫ふんだ。ズボンを繕ふんだ。確乎しろ！グズ〳〵してゐると此物指がイヤといふ程汝の尻邊へ衝突るぞ！俺はナ、一打で七人やッつけたんだ。二匹の鬼も殺したぞ。一角獸が一匹と荒野猪を一匹も生擒つた。寢室の外で待つてる奴なんか、怖いと思つて何うなるか。』

サア之を聞いた者の驚きといつたら！戶の外に待つてゐた者も、天子樣も、皇后樣も、丁度虎狼にでも追驅けられるかの樣に、後をも見ずに其處を逃げ出しました。そして誰一人モウ歸つて來るものはありませんでした。

裁縫師はソコで國中へ布令を出して、『天子樣は長い間、自分の勝手な事ばかりして、稅を取り立て丶人民を苦しませてゐた罰で、とうとう國にも居られなくなつて逃げて行つたから、自分もモウ天子樣になるのは止めて、人民と一緒に相談して、色々國の爲になる事をしたい。』と申しました。人民も其親切なのを喜んで、裁縫師を兄さんのやうに敬ひ親しみました。

裁縫師は其後大層心掛の善い娘と結婚しましたが、夫婦仲も睦ましく、

長壽をして、國中の人民と共に幸福に一生を送りました。めでたし、めでたし。

○らく我記（二）

なめし

年若き學生二人、興ありげに何事か談合ひ行く、聞くとは無しに耳傾ければ、

甲『奴は女學生風で出るが、一體何處に通ふんだろう？』

乙『なアに女學生ぢや無いよ、ナンバン屋へ通ふのさ』

甲『南蠻屋とは何だ、何處にあるんだ？』

乙『君にも似合はんね、何番屋を知らないのか』

＊　＊　＊　＊

地方出の中學卒業生、未來の成功を夢みて大に氣焔を吐く、側より

『お前なんざあ、そんなに威張つたつてオワイヤーにはなれやしない』

『成つて見せますとも、お穢屋位ゐになれないで如何します』

○夏やすみ

木生

（朝）

顔を洗ひに出て見ると
もう顔貌が咲いて居る
露がキラ〳〵奇麗だな
明朝も負けずにはや起きよ
おてんとう樣も出ぬ内に
庭ものこらず掃いちやつた
どりや朝飯の出來るまで
作文しようか復習うか

（晝）

暑いなんぞと弱蟲が
晝寢するのは大嫌ひ
山も野原も川も田も
皆んな僕等の運動場
疲れて休む木の蔭に
蟬の鳴くのは大好きよ
蟹も蜻蛉もお友だち
アレ〳〵蛙も鳴いて居る

（夜）

御飯も濟んだ眠ろまでに
手習ひしようか繪を書こか
お月さんをば呼びながら
もう「こうろぎ」が鳴いて居る
螢集めて來なくとも
ランプの燈火が明るいよ
さあ精出して本讀んで
昔の人よりエラくなろ。

○新刊雑誌瞥見

◎**うらにしき**（一七七） 例によりて眞實なる文字うれし△家と宗教△女子問題の過去△素人下宿（小説）等讀むべきもの多し、月刊、神田駿河臺北甲賀町十三、尙絅社

◎**貴婦人**（一） 恐ろしき名にて吾々には傍へも寄付けまじく思はるれど實物はそうでも無し、謂ふ所の貴婦人とは貴族ならずして反つて陋巷に潜む人格高き婦人をいふのだそうなれば、つまり誰も讀んで然るべきものならん△勞力よりする慈善△樂界雑觀（天谷秀）△人を老いしむるの弊△二十博士の結婚期△活動せる上流婦人、等あり、小新聞形八頁、月二回、一部三錢郵税五厘、發行所は東京神田三崎町三の一、婦女通信社

◎**をとめ**（二の七） △姉妹△小説小慈善家△雀の報恩△少女の投書等あり、月刊、六錢、東京麹町區永田町一の十九、大日本婦人教育會内をとめ社

◎**大阪平民新聞**（四） 此號に家庭雑誌を褒めた評があるから、こちらでも褒めると眞似をする樣で剛腹なれば褒めまいと思ふが矢張り褒めない譯に行かず、滿紙血漲り、火燃え、編輯も中々うまく行屆けり、社會主義を知らんとするものは讀むを要す、殊に此號にある「大阪巡航會社の亡狀」と題する記事は記者が警察へ引張られたほどの記事であるから實に物騒な、宜しからざる（資本家の爲に）記事である、可愛いゝ新聞形十六頁、月二回、一部五錢、大阪市北區上福島北三の一八五大阪平民社

◎**新公論**（廿二の七） △日本特殊の愛國心を說明して對米問題を斷ず△遊廓と人間の品性（江原素六）△醫師の德義（樋口勘次郎）△宦界の一大人物△小説留さん（中里介山）

◎**學生タイムス**（三の一） △現代の青年を誡む（大隈重信）△職業と修養（三宅雄次郎）△青年の海外雄飛（竹越與三郎）△豐臣秀吉と德川家康との人格（山路愛山）等讀物澤山、月二回、八錢、牛込矢來町四四學生タイムス社

◎**めざまし新聞**（一週年紀念號） 巻頭の「讀者心得」「一週年」にて先づ書痴續きの寢ぼけ眼が醒めたり、「谷中村の慘劇と島田三郎」は伊藤痴遊氏の筆に成る血多き文字、「不忍池畔賣店の夜色」には「咄風俗の大壞亂、一副の春畫帖、二百の私生兒をどうする」の氣焰すさまし、何にしてもホントにめざましい新聞なり、腰拔や星菫黨は「購讀の義固く禁制候事」とあるが内々で買つて見るのは知れやしまい、發行所は下谷區谷中眞島町一其事務局、月三回五の日、一部三錢

○編輯局より

深尾生

▲大阪に森近といふ宜しからぬ兄貴があつて、近頃其平民紙上でボクの有りと有らゆる變名をスッパ拔いたものだから、方々から「鐵和尙樣」と宛てた手紙が來て弱つて了ふ。中には又御丁寧にも其宛名のわきへ「生ぐさい、くさい和尙樣だれ」などと書き添へてくるのもある。

▲ボクモ意趣返しに一つスッパ拔てやる。諸君大阪で出る滑稽新聞といふ色氣と肝癪なコキ交ぜた月二回の雜誌を見たまへ。其社說を書く奴に「見牛」といふ讀み方さへ判らぬヒチむづかしい名がある。あれが森近の仕事だよ。ボク想像するに、あれを書く時の森近の顏は、先づ當世流行夏向きの髭をヒ子リながら、目尻を吊り下げ、額には靑筋をヒクヒクさせ、そしてオマケに玉の汗を流してゐるに違ひない。大阪地方にゐる暇人は些と行つて見て來たまへ。

▲とは言ふものゝ、先生も矢張り無茶苦茶に忙がしいのだから、餘り邪魔はしない樣にしてやりたまへ。何も功德だ。

▲今年は妙な年だ。吾々二十八黨（註に曰く辰の歳の今年廿八歳の男どもの事） 皆な多忙、森近然り、ボク然り、原霞外と申す優にやさしき御方樣も、あはれや「めざまし新聞」の編輯やら、

社會新聞の手傳ひやらで、此頃は碌々なまけても居られざる由、それから山川均君、相變らず堺君と共に「社會問題辭典」の編纂にこれも大多忙。

○いろ／＼の出來事

●二少女相擁いて情死す　短か夜も未だ明けやらぬ去る六月二十九日午前三時頃、芝區高輪北町の鐵道線路に身を橫へて、あたら花の莟を風雨に任せたる美しき二人の少女あり。一人は赤阪區田町四の十一藝妓屋石廼屋の養女お養（十七）にて藝名をみのると云ひ、今一人は之も同家の養女にてお春（十五）といふものなり。二人は離れぬ樣にと、互に袖と袖とを結び合はせ、みのるは鼻より上にかけ頭部を微塵に粉碎されたる上、右足も關節より切斷され、お春は又左腕を切斷されて、何れも縡切れゐたり。

頭髮は兩人とも銀杏返しにて、みのるは眞岡木綿中形の浴衣に黑繻子とメリンス腹合はせの帶を締め、お春はまた木綿縮の大形浴衣に紫地の小倉帶を二折りにして結びゐたり。二人の衣類が汐水にて濡れゐたるより察すれば、最初其附近の海に身を投げたれども、折柄引汐時にて死れざりしより、這ひ上りて鐵道自殺を遂げたるものと見ゆ。

二人の養母なる石廼屋の主人伊藤お末（四十三）は性來强慾の女にて、自分が藝に達者なるより、抱へ藝者等が藝の不出來なるをば常に烈しく罵るのみならず、お坐敷が晩くなり腹を空らして歸つて來ても碌に御飯も食べさせず、且つ平生の副食物と云つても殆んど人間の口には入らぬやうなものばかりを與へ居たりとぞ。

自殺の三四日前、二人は同區田町のお師匠さんより敎はりたる長唄をお末の前にて復習せしが、小供の事とて處々忘れたり間違つたりしたるに、邪見のお末は「貴樣みたいな奴は迚も駄目だ」と盛んに苛り散らしたるより、可憐なる兩人はすつかり悲觀して了ひ、それよりモウお稽古にも行かず、毎日二人して額を鳩めてヒソ／＼と濕やかに談り合ひ居たりとの事なり。

死ぬる前日は、二人とも例よりは早く起きて、朝より揃つて腰卷を洗濯して之を締め。頭髮も奇麗に梳つて風呂に行き、お末の歌舞伎座見物に行きし隙に家を拔け出で〻、あちらこちらと死場所を選みつ〻、一晩を泣きあかし、遂に星かげ漸く白みゆく曉方、もろくも露と消たるなりと。

●中尉の妻我子を絞殺す　六月十五日以來、芝區芝口二の六旅人宿越中屋方に滯在せる花羞かしき美人あり長女梢（八つ）次女靜子（六つ）三女光枝（一つ）といふ三人の子を伴ひゐたるが同月廿九日夜よりヒタと赤兒の泣聲せざる樣になりしより、七月二日の夜十時頃、女の風呂に行きし留守の

間に宿の者がソツと覗き見たるところ、光枝の身體は冷たくなり居る始末に、早速此の美人は絞殺の嫌疑を以て拘引せられたりと

此女は鹿兒島縣薩摩郡宮城村休職陸軍步兵中尉川井、、助(三十三)の妻石子(二十四)といひ、去る三十一年に北海道旭川の㠯助の勤め先にて結婚したるものなるが、昨年六月、㠯助が隊を罷め、楮をつれて故鄕鹿兒島に歸りしより、石子は姉と實母の居る函館に行きて暫く世話になり、やがて靜子を連れて㠯人の跡を追ひたり。

然るに鹿兒島に着きて見れば、㠯人は北海道より連れ來りし情婦と共に在りて石子に對する愛情冷やかになり居り、剰へ豫て吹聽されてありし財産は影だに無く、棲む家すら持たざるに、石子は絕望に心を亂され、離緣と臍を固めて其處を立ち別れ、佐賀市に行きて身寄の家にて光枝を生みたる後、北海道の姉の許へ歸らんとて東京まで來れるなりき。

光枝の屍體は大學病院にて解剖したれども、何分日數たちし事とて死因を確かむること能はず、一方石子は少からず精神を激動せしめて普通の辨別力を失ひ居るより、超えて九日に至り、檢事は起訴せざる事に決し石子を監獄より放免したり。

二女と共に姉の夫に扶けられて函館に歸りたる石子、今頃は如何に其日を送り居るべき。記者は此の記事を書き終りて現代男子の横暴の犧牲と爲りたる石子の爲に、熱き〱涙を搾りぬ。三人の母子こひねがはくば永久に幸くあれな。

●西大將夫人の發狂　陸軍大將西寬次郎氏夫人みき子(五十)は其次男虓雄(少尉)が不品行より遂に懲戒處分を受けたるを苦にし、良人渡英の留守中斯る失態あらしめて如何にして申譯を爲すべきやと煩悶の極、終に精神に異狀を呈し、六月廿五日頃より『不肖の子を刺殺して自分も自殺せん』と叫びつゝありと。

子を以て親の所有物品の如くこゝろふる謬りは聽て子の少しの過失をも寬假せざる事となり、而して家族の名譽にのみ汲々たるの果は、心狹き婦人をして遂に發狂するに至らしむるなり。あはれむべきに非ずや。

●小學校教員の轢死　六月二十八日夜廣島縣安藝郡倉橋島村鹿島小學校教員伊藤賢雄は父母と校長とに三通の遺書を殘して、廣島驛櫻場踏切にて轢死したり。厭世の爲なりと云ふ。厭世か。彼の家は貧しかりしなるべし。

●華嚴病の猖獗　大阪市東區東雲町新見奈良藏(二十)は七月一日、日光華嚴の瀧に投身せんとして巡査に救はれたり。東京神田區鍛冶町八山口利

右衛門方同居の愛知縣東春日井郡春日井村下郷六山口德藏(三十)は、淺草區千束町二の十二新聞縱覽所紀の國屋の雇女埼玉縣北足立郡片柳村深谷朝子こよ(二十)と共に情死を決し、七月一日華嚴に行かんとせしぞ、日光の宿屋にて巡査に引留めらる。又、青森市北町三十五、三上幹(三十)は苦學の目的にて上京せしも、思ふ樣にならぬより、華嚴に行きしも、警戒嚴重にて之も思ふ樣に行かず、詮方つきて七月一日警察に自首し出でたり。生存を拒絕する人間次第に多くなり行くを見れば、此社會は餘程住みにくゝなれりと見えたり。

●●●●●●●●

●電話交換手此世を辭職す　七月四日午前零時半頃、府下荏原郡大崎村の舊日鐵線路にて紫紺の袴を穿きて轢死したる美人あり。東京芝區三田四國町二の二神谷きよ(十七)と云ふ新橋電話局の交換手なり。死因は宿主なる並川某(遠緣に當る)が畜生呼はりまでして虐待したる爲なりと傳ふ。さまでに辛かりしか。

●●●●

●本誌發展　本誌は第五卷第九號から一大奮發を以て改良の途に就きました、號を逐ふに從つて益々善くして行くつもりであります。

●●●●

●本誌の見本　は特に郵券四錢で差上げます、又本誌購讀勸誘の爲め知人へ本誌を配りたく思ふ方は郵券四錢と送り先の住所氏名をお送り下さい、さすれば本社から直接郵送致します、但し號數指定の御注文は普通の代價を頂きます。

定價	
	一部 金八錢 六ヶ月前金四十二錢 一ヶ年前金八十錢 (何れも郵稅共)
廣告料	特別一頁 十圓 普通一頁 七圓

▲本誌は每月一回(一日)發行とす。
▲代價は小爲替を以てお送り下さい。郵券代用ならば五厘切手で一割增に願ひます。
▲御注文の時は必ず何卷何號より何號まで何冊の前金と明瞭に御記載を願ひます。
▲御手紙には必ず住所姓名をハツキリとお書き下さい。又御轉居の際は新舊の宿所を併せて御通知を乞ふ。
▲本誌は前金でなくては一切御註文に應じませぬ。前金の切れた時には帶封に「前金切」と朱印を捺して上げますから御注意下さい。
▲歐米諸國よりの御注文は別に一册に付二錢づゝの郵稅を申受けます。

明治四十年七月廿五日印刷
明治四十年八月一日發行
東京市本鄉區弓町二丁目一番地
發行兼編輯人　熊谷勝
東京市京橋區日吉町十番地
印刷人
印刷所　近藤商店
發行所　東京本鄉區弓町二の一　平民書房
大賣捌所　上田屋　東京堂　良明堂　東海堂

平民書房新刊書

MARRIAGE BOOK.

三田谷巳之吉著

婚結と婦人衛生

全

定價金六十錢　送料金六錢

處女にして一たび其衛生の道を誤らば生涯取返すべからざる疾患を醸し嘗に一身の不幸となるのみならず人生の最大事なる結婚生殖を遂ぐる事も叶はずして涙に歳月を送るに至る事往々あり、此の不幸を救ふは唯最愛なる子女を有する母親の任なれども由來衛生思想なき我國の家庭は徒らに生殖に關する事を口にするを忌みて當然且つ重要なる此敎育を與ふる事を忘れたり、生殖衛生は決して卑猥事に非ず、さるを此誤りたる母親の爲に不幸に沈みつゝある少女幾何ぞと考へ來れば轉た寒心に堪へざる也、今本書は是等無智なる母親に代りて文字の許す限り平易に親切に有りとあらゆる婦人衛生の心得を説きたり、未だ月經時に達せざる處女は月經前の準備の爲めに本書を見よ、初經時に臨める處女は其始末の爲に本書を見よ、結婚前の處女、妊娠中の婦人、育兒期終經期にあるの婦人、皆本書に依りて重要なる敎育を受くる事を忘るゝ勿れ
結婚の持參品として本書より必要なる物他にありや、結婚を祝する贈物として本書より適當なるもの他にありや

東京市本郷區　平民書房　弓町二丁目一

平民書房新刊書

嘉悅孝子、津川海村共著

主婦の修養

全一册

クロース製美本

定價金五十五錢

郵送料金六錢

女子教育家として有名なる二先生が質實に女子の心得を說けるものは本書なり一たび本書を繙くものは精神及び肉體の修養法より日常生活法の微些なる點に至るまで親切と丁寧とを極めたる有益なる**教訓**と**忠言**とを聞くことを得べし主婦讀まざるべからず、令孃讀まざるべからず、舅姑讀まざるべからず、青年男子亦讀まざるべからず

●堺利彥君
●幸德秋水君 序

米國社會黨新聞記者 金子喜一著

海外より見たる社會問題

全一册

定價金四十錢

郵送料金四錢

著者は北米シカゴの日刊社會黨新聞の記者にして又同地社會黨の一會員なり**忌憚**なき論評**犀利**なる觀察**明快**なる論斷**日米兩國**の社會問題は收めて此の一卷に在り**讀め**諸君、本書を讀まずして誰か北米の日本人排斥を云爲する、本書を見ずして誰か日本の社會問題を解かんとはする

東京市本郷區弓町二丁目 平民書房

平民書房新刊書

持原皿山
桂木伴水 共著

（定價卅五錢
郵稅四錢）

弱者

強い者は食ひ弱い者は皆**食はれ**ます血も骨も肉も筋も皆な慘たらしう食はれても弱者は未だ我慢が出來るでせうか、泣き叫ぶ腸をえぐる樣な悲しい聲を聞きつゝ強者はいつまでも之に堪へ得るでせうか強者弱者、いづれにもせよ本書に就いて學ぶ所がなくてはなりませぬ。

●**恠物傳**は『明治闇黒史』の筆者として有名なる有磯逸郎氏が其獨特の**怪筆**を揮つて文明の今日世の中に蔓つて居る**闇中の恠物**を忌憚なく描き出したるものでありますその**奇警なる觀察**と雄勁なる筆力とは直ちに以て**百鬼晝行**の**偉觀**を紙上に躍如たらしめて居ます。日本の魑魅魍魎のどんなものかを知つて化されぬ要心も肝要でせう

恠物傳

有磯逸郎著

（全一册）

定價金三十五錢

送料金四錢

東京市本郷區 平民書房 弓町二丁目一

平民書房新刊書

『平家』が我が國文中至妙至高のものなる事は今更之を論ずるにも及ばざるべし。されど『平家』には異書甚だ多くして古來何人も何れが其正なるを甄別するに苦しむ。況んや坊間に流布せる活字本に至つては正確完全なるもの殆んど求め難からんとす。本書は比較的誤謬なしと認められたる片假名本を基礎として嵯峨本長門本等により嚴密なる校訂を加へ一字一句も苟もせざるのみならず卷頭には赤堀又二郎氏の苦心に成れる數十頁の解題及び數十頁の系圖を添へ、且つ平家物語標註に於ける詳傳數十頁をも添へたるものなり。製本亦堅牢美麗なれば以て架上の裝飾たらしむべく而も價格の廉なるは現時出版界の異數とも稱すべし、幸に愛讀を賜へ

◀赤堀又二郎校▶

校訂評註

平家物語

平清盛及び重盛像
平清盛の眞筆
寫眞版挿入

（上篇）

定價金五十五錢
送料金十二錢

中島孤島著

小説 山鳩

（最新刊）

定價六十五錢
郵税金六錢

孤島子の文、世既に定評あり、弊書房は今更之を喋々して江湖に薦むるの愚を避けんとす唯願はくば速かに一本を購ひて久しき渴望の情を醫されんことを、輕妙の筆恐らくば諸君をして身三伏の暑熱中に在る事を忘れしむべし

圖書目録

平民書房發行及び取次の圖書總目録御入用の方は往復葉書にて御遠慮なく御申込を乞ふ

東京市本郷區 **平民書房** 弓町二丁目

家庭雜誌第五卷第十號　明治三十六年四月五日第三種郵便物認可　明治四十年八月一日發行



復刻版 家庭雑誌 全6巻
附/解題・解説・総目次・索引

一九八三年一一月二〇日発行
定価 四八、〇〇〇円
発行者 船橋 治
発行所 不二出版株式会社
〒113 東京都文京区本郷三―一六―六
TEL 〇三(八一二)四四三三/振替東京6―94084

LOAN PERIOD 1 **1 MONTH**	2	3
4	5	6

ALL BOOKS MAY BE RECALLED AFTER 7 DAYS

DUE AS STAMPED BELOW

AUG 20 '89		
JUL 12 1989		
Santa Cruz Jitney		
REC'D		
JUL 14 1989		
FAL		

UNIVERSITY OF CALIFORNIA, BERKELEY
FORM NO. DD9, 15m, 12/80 BERKELEY, CA 94720